

史跡 平出遺跡

遺構確認調査報告書

—昭和 56 年度—

昭和 57 年 3 月

塩尻市教育委員会

史跡 平出遺跡

遺構確認調査報告書

—昭和56年度—

昭和57年3月

塩尻市教育委員会

序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され、昭和27年3月には国の史跡に指定されました。

しかし、史跡指定により既に30年近い年月が経過し、この指定地が市街地に隣接していることもあり宅地化の傾向が見え始めてまいりました。このため塩尻市教育委員会では昭和50年から51年度にかけて文化庁ならびに県教育委員会の指導のもとに平出遺跡保存管理計画が策定されました。この計画書の将来の計画の中に「遺跡内未調査地区の遺構確認調査の実施」が掲げられています。塩尻市教育委員会では、この保存管理計画書に基づき、国・県の補助事業として昭和54年度から昭和56年度までの3年計画で遺構確認調査を実施することとなり、昭和54年度には指定地内東部地域の、昭和55年度には指定地内北部地域の調査を行いました。本年度はその最終年度にあたり、史跡指定地西端地域の調査を計画・実施しました。

調査にあたっては、原嘉藤先生を団長に、調査員には中信考古学会の先生方に、また調査補助員には信州大学考古学研究会を中心とする大学生をお願いしました。初冬の寒さの中で献身的な御尽力を賜りました。また、今回の確認調査が無事終了できましたことは、地主の川上豊・川上慎太郎両氏をはじめ、平出区長塩原君義氏等地元の方々の深い御理解と御援助によるものであります。ここに哀心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和57年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小 口 利兵衛

例 言

1. 本書は塩尻市教育委員会が長野県塩尻市大字宗賀所在の史跡平出遺跡の遺構確認調査を昭和56年度国県の補助事業として実施した報告書である。
2. 調査は、平出遺跡発掘調査団（団長・原嘉藤）に委託し、現場での調査は昭和56年10月30日から11月12日まで行った。
3. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成までは平出遺跡考古博物館において、昭和57年2月1日から2月26日まで行った。
4. 本書は、原嘉藤団長を中心とし、各調査員の共同討議の上で執筆し、原団長の校閲を受けた。
5. 調査に当たり、土地の所有者である川上豊・川上慎太郎氏ならびに地元平出区の関係者各位には多大な御配慮・御援助をいただいた。ここに銘記しお礼としたい。
6. 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目 次

序 文

第 I 章 調査経過	1
第 1 節 調査にいたるまでの経過	1
第 2 節 発掘調査の方法	2
第 3 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の概要	6
第 1 節 遺跡の立地および自然環境	6
第 2 節 確認調査の要約	9
第 III 章 遺構・遺物	11
第 IV 章 遺跡の西限	34
第 V 章 昭和54年・55年度調査の概要	36
第 1 節 昭和54年度調査	36
第 2 節 昭和55年度調査	40
第 VI 章 遺跡の範囲	43
第 1 節 地形・地質からの検討	43
第 2 節 遺構・遺物からの検討	44

挿 図 目 次

第1図	史跡指定地全体図	3
第2図	発掘区全体図	4
第3図	平出遺跡位置図	6
第4図	発掘地点を通るN20E（Nトレンチ方向）地形断面図	7
第5図	発掘地点の層序断面図	8
第6図	A-3, A-5 検出遺構	12
第7図	B-2, B-6 検出遺構	14
第8図	各グリッド出土の縄文土器	16
第9図	各グリッド出土の縄文土器・石器	17
第10図	C-1, C-3 検出遺構	19
第11図	各グリッド出土の土師器・須恵器・灰釉陶器	21
第12図	D-2, D-4 検出遺構	23
第13図	各グリッド出土の土師器・須恵器・灰釉陶器	24
第14図	D-4 検出遺構出土土器	26
第15図	E-1 検出遺構	27
第16図	I-102, K-102 検出遺構	29
第17図	K-102 出土錘石	30
第18図	F-22, F-3 検出遺構	37
第19図	G-12, O-7 検出遺構	38
第20図	E-3, G-12, O-7 出土土器	39
第21図	溝状遺構全体図	41
第22図	溝状遺構出土遺物	42

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査にいたるまでの経過

平出遺跡が昭和20年代の大規模な発掘調査により縄文時代および古墳～平安時代にかけての重要な遺跡であることが判明し、この結果をうけて国の史跡に指定されたのは昭和27年のことであった(第1図)。以来、既に30年近くの日時が経過し、史跡指定地周辺にも様々な変化が生じ、特に市街地に隣接していることもあり宅地化の傾向が顕著に見え始めてきた。このため昭和50年・51年度の両年にわたり塩尻市教育委員会では文化庁ならびに県教育委員会の指導のもとに平出遺跡の保存管理計画書を策定した。この計画書の将来計画の中に「この遺跡の中心および性格等は過去の数%の発掘調査のみでは正確な判定はできない。またこの遺跡が南方(現在の平出部落方向)へのびていることは前述のとおりであり、東限と西限と未確認のままである。従って、近い将来において、これら未確認な諸点を見極めるためにも、未調査地区の年次計画的な遺構調査が必要である」と遺跡内未調査地区の遺構確認調査の必要性が述べられている。

そこで塩尻市教育委員会では、この保存管理計画書に基づき、昭和54年度から3ヶ年計画で遺跡の範囲が不明確な史跡指定地内東・北・西側地区の遺構確認調査を計画した。この計画に基づき、昭和54年度は遺跡の東限を極めることを目的に指定地内東部地区の調査を実施し、また昭和55年度には北限を知るために指定地北側地域の調査を行ない、それぞれおよその東限・北限を知ることができた。最終年度である今年度は西限を極めるべく指定地内西側地域の遺構確認調査を実施した。

発掘調査は10月30日～11月12日まで行ない、以後引き続いて2月末まで記録類、遺物類の整理作業・報告書の刊行を行なった。

調査に当っては、調査団長を原嘉藤先生にお願いし、調査員には中信考古学会の諸先生方に、また調査補助員には信州大学考古学研究会を中心とする大学生をお願いした。諸先生方、学生には本務多忙のところ御指導いただき、厚く御礼申し上げたい。

調査団の構成は次のとおりである。

調査団長 原 嘉藤

調査員・調査補助員 島田哲男, 山本紀之, 三村 肇, 降旗俊行, 直井雅尚, 込山秀

一、大竹庄司，深井幸人，上野山恭和，永井ちひろ，高橋由美，小林政子，
田中正治郎，奥山元彦，小嶋秀典，篠宮 正，宮城孝之，三好博喜，平林
彰

第 2 節 発掘調査の方法

今年度の調査の目的は平出遺跡の遺構分布の西限を知ることにあつたため，昭和26年に行われた第4次調査の際設定されたNトレンチ西方の果樹園を除く畑地に，調査地区を設定した（第1・2図）。

調査実施にあたっては，調査可能な畑地部分9900m²を対象とし，そのうち405m²を調査した。グリッドは3×3mものを10mおきに，南北方向にA～K，東西方向1～6及び101～103の計44区を設定した。調査は遺構の有無の確認と土層観察に主眼をおき，遺構の存在が確認された場合はその性格を究明するためグリッド内の部分のみ掘り下げを行った。遺物は各グリッド・遺構毎に出土地点，層位及びレベルを記録して取り上げた。

（直井雅尚）

第 3 節 調査日誌

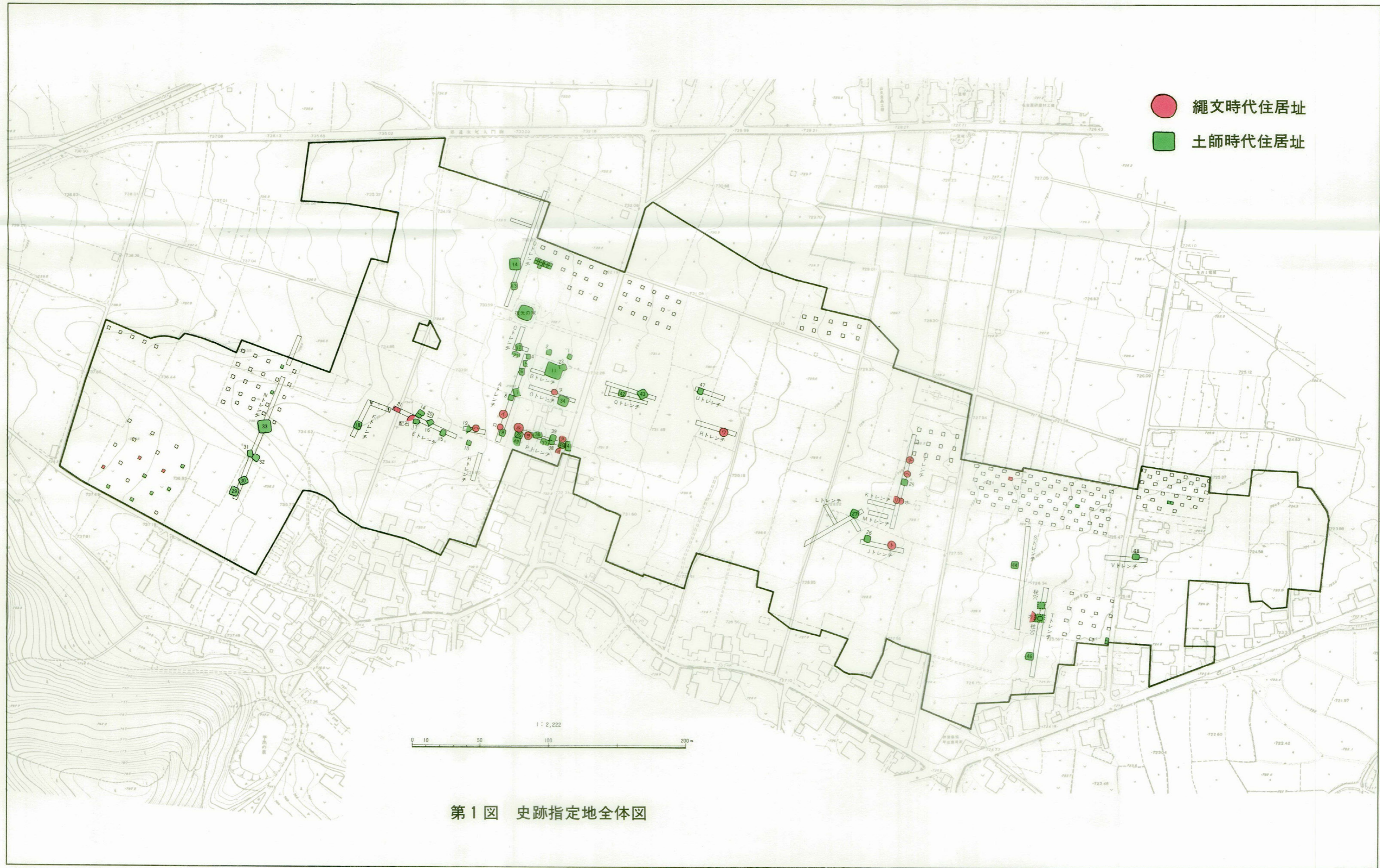
10月30日（金）晴 午前9時，全員調査現場に集合する。事務局より調査に至るまでの経過，調査の目的を含めた挨拶があり，続いて発掘に際しての注意事項，説明がある。その後直ちにA～F 1～6のグリッドを設定し（南区），A 1・3・5，B 2・4・6，C 1・3・5，D 2・4，E 1・3，F 2・4の各グリッドの掘り下げを行う。各グリッドとも遺物の出土は少なく，約半数のグリッドがほぼ掘り下げを完了する。A 3，C 3，E 1で住居址が，またA 5，D 2で小竪穴がそれぞれ検出された。

10月31日（土）晴後曇 昨日に引き続き各グリッドの掘り下げを行い，完了グリッドからセクション図を作成する。A 3，E 1の各住居址の床面の検出および壁出しを行う。A 3，E 1からは土師器を中心に，またC 3からは灰釉陶器が出土する。

11月1日（日）晴 A 3，C 3の各住居址を精査し，平面図を作成する。新たにB 6，C 1，D 4から住居址が検出される。D 4からは石棒が出土する。南区の調査を続行する一方，北区にIグリッドを設定し，掘り下げを開始する。北区Iグリッドはロームまで薄く，出土遺物は極めて少い。

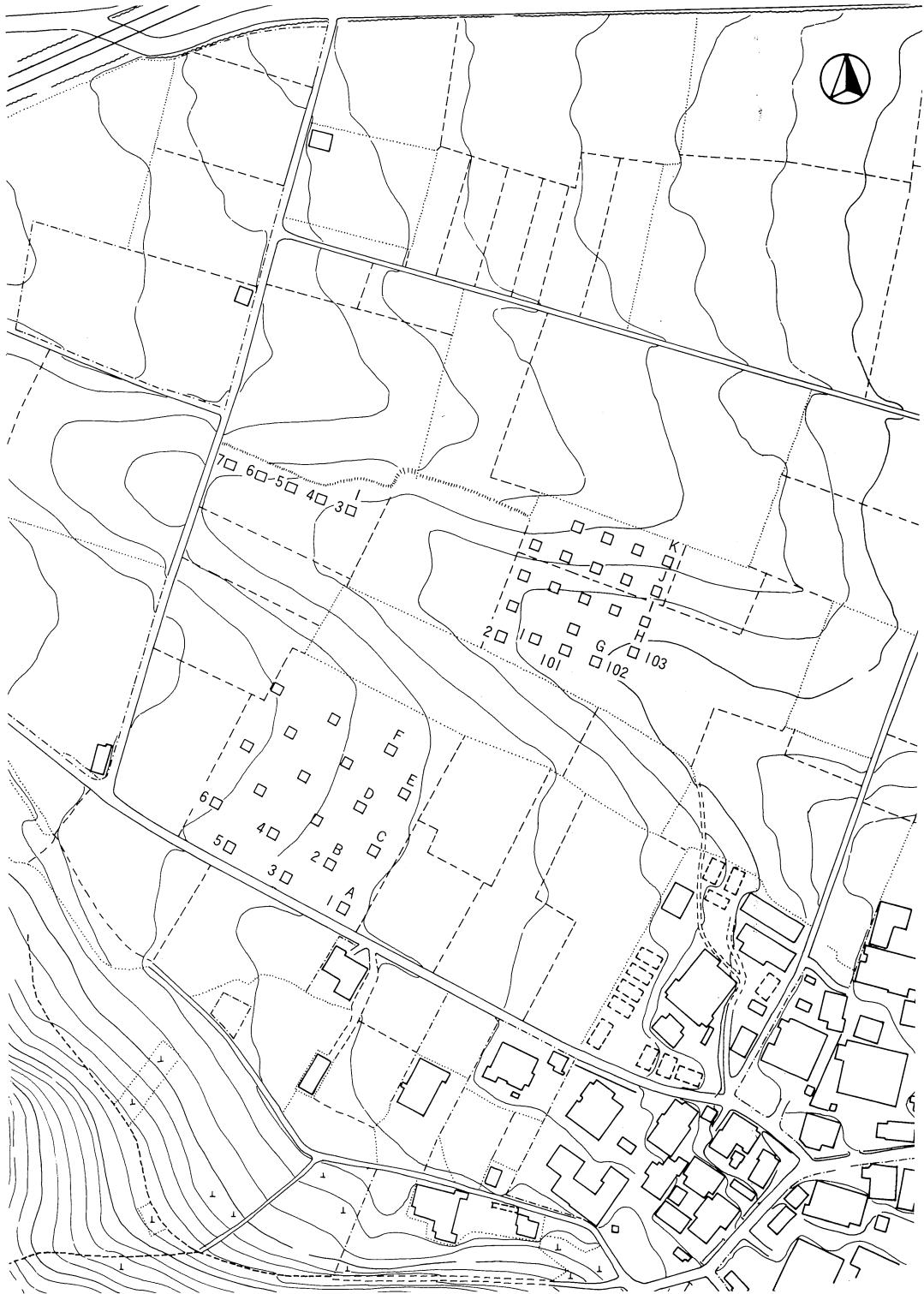
11月2日（月）雨 雨のため現場での作業は中止。博物館にて土器の整理を行う。

11月3日（火）曇 南区の各グリッドのセクション図を完了する。E 3において層序を



- 縄文時代住居址
- 土師時代住居址

第1図 史跡指定地全体図



第 2 図 発掘区全体図 (1 : 2,000)

確認するため掘り下げを行う。北区東側にI・J・Kグリッドを設定地掘り下げを行う。

11月4日(水)晴 昨日に引き続きI 1・101, J 101・102, K 101・102の掘り下げを行う。I 3～7は特に遺構の検出もなく、セクション図を作成して完了する。

11月5日(木)晴 A 5 検出住居の精査, 平面図, セクション図の作成。I～Kグリッドは昨日に引き続き掘り下げを行い, 掘り下げ完了グリッドからセクション図を作成する。

11月6日(金)雨 雨のため現場での作業は中止。博物館にて遺物の整理。

11月7日(土)晴 H 2, G 2・101・102, H 103の掘り下げ, 掘り下げの完了したI 103, H 101, J 102のセクション図作成。I 102 検出住居の精査およびK 102 検出住居址の平面図を作成する。

11月8日(日)晴 G 102, I 2 掘り下げ。A～F(南地区)の調査完了グリッドの埋めもどしを開始する。

11月9日(月)晴 G 102, I 2 の掘り下げを行い, 掘り下げ完了後セクション図を作成する。南地区は昨日に続いて埋めもどしを行う。

11月10日(火)晴 北地区も調査が完了したので埋めもどしを行う。午後4時30分全地区の埋めもどしが完了し, 現場での発掘調査は終了した。

11月11日(水)晴 現場から発掘器材および出土遺物, 記録類を徹収する。

11月12日(木)晴 博物館にて器材の整理, 出土品, 図面類の整理を行う。

2月1日～2月26日 博物館にて諸記録の整理, 出土品の洗浄, 注記, 復元, 図面化を行う一方, 原稿の執筆を行う。 (山本紀之)

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立場および自然環境

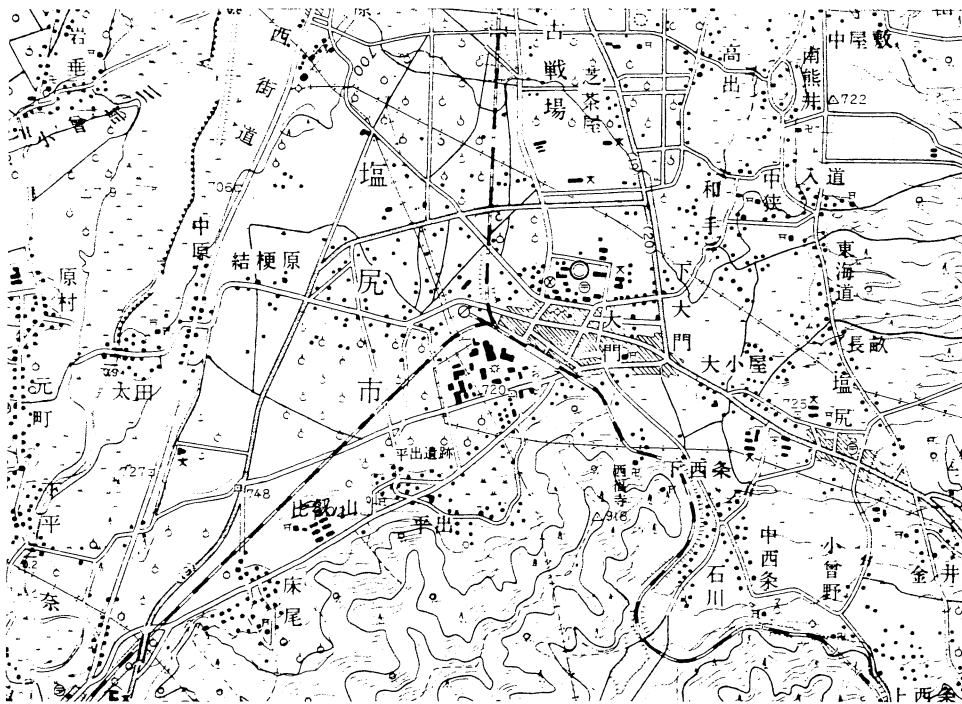
(1) 遺跡の位置と地形概要

平出遺跡は、塩尻市の中心街から南西へ約1.5kmの平出地区に位置し、現在の平出の部落と県道床尾大門線（旧中山道）に挟まれた畑地上に広がる（第3図）。

この付近は、木曾谷から松本平へ流出する奈良井川によって形成された通称、桔梗ヶ原高地と称せられる隆起扇状地の扇側部にあたるため、地下水位は低く、葡萄園を主体とした畑作利用の地域となっている。

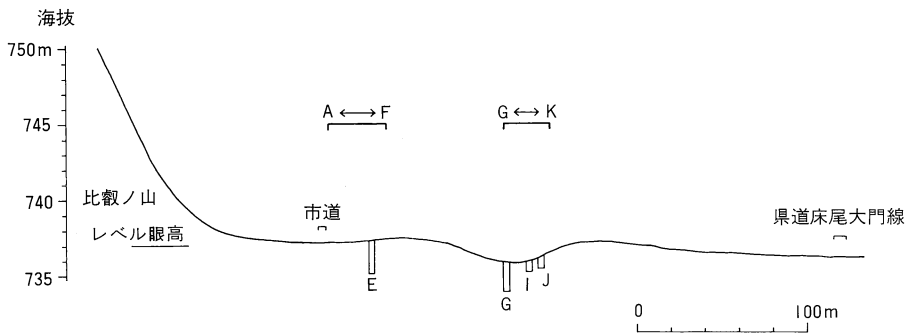
南側には、海拔1000m前後の山々が迫っており、またこの一角から分岐して海拔810mの比叡ノ山の小丘が北西へ延びている。

古来、平出の集落にとって貴重な水資源となっていた平出の泉は、この分岐点に位置しており、その湧水量は現在でも年間を通じてほとんど変化はない。泉の北側から流出する



第3図 平出遺跡位置図 (1:50,000)





第4図 発掘地点を通るN20E（Nトレンチ方向）地形断面図

渋川の小河川は、部落の中で東に向きをかえ、遺跡の南側に沿って東流する。

今回の発掘地点は、史跡指定地の最西端にあたり、比叡ノ山を挟んで、ちょうど平出博物館の反対側に位置する。付近一帯は畑地に利用されており、海拔は737mである。

全体図に明瞭に表わされている発掘地点北側のN60°W方向の凹地帯は、地表流水の浸食による浅谷であり、これについては昨年度の報告書にその概説を記載したが、遺跡立地において平出の泉と共に重要な役割を果しているものである。詳細については後章で述べる。

発掘区は2ヶ所、すなわち南側の平坦域（A—Fグリッド）と北側の浅谷域（G—Kグリッド）に分けられる。

(2) 層序

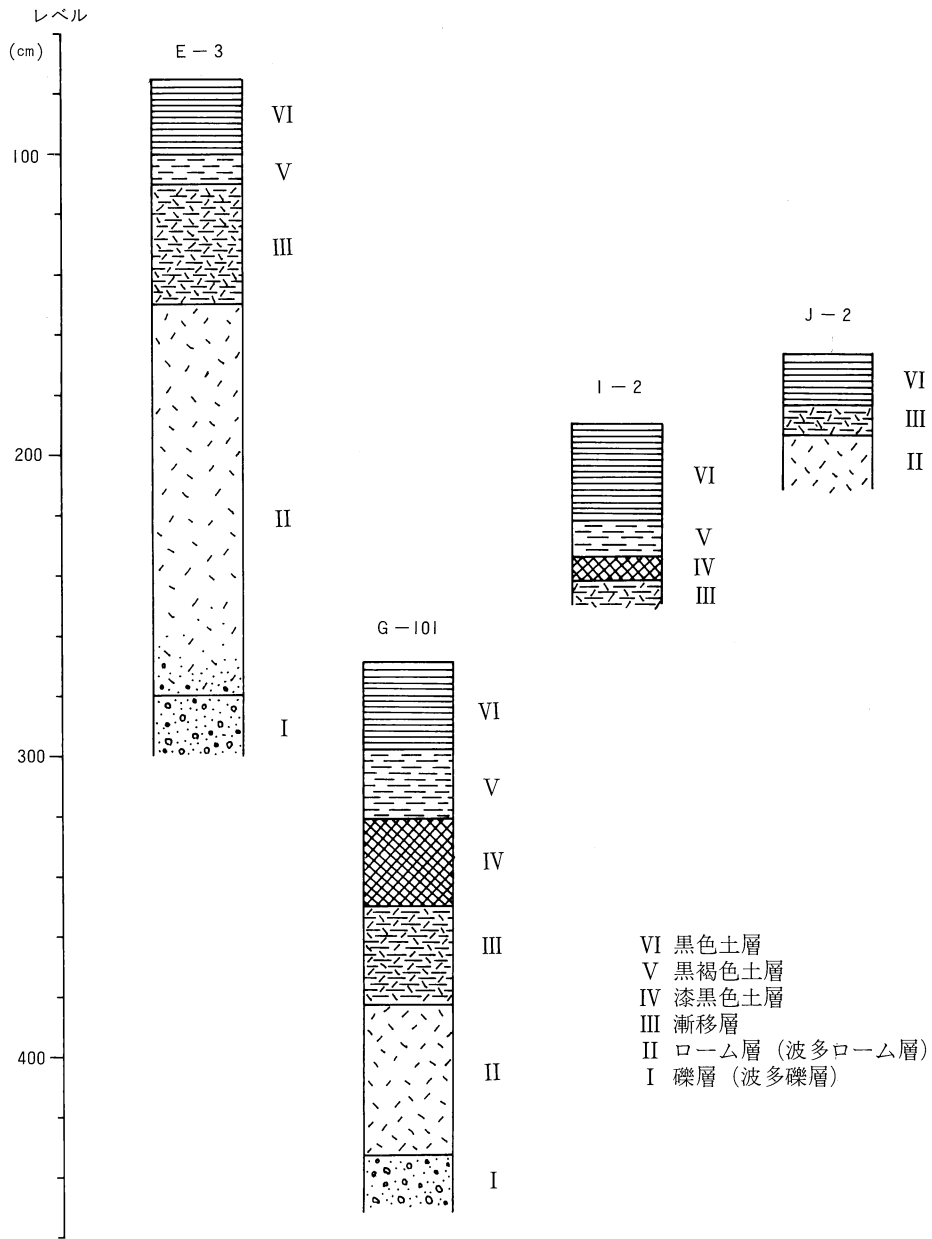
発掘地点の地層は、桔梗ヶ原扇状地を構成する波多礫層をベースにして、その上に厚さ1.5～2mの波多ローム層が堆積し、更にこれを沖積層（表土）が被覆している。南北方向の層相変化を把握するために、第4図の4ヶ所で層序断面をとり、第5図に対比配置を試みた。

VI層…黒色土。多少砂質の部分がみられる黒色壤土で、耕作による攪乱が著しい。

V層…黒褐色土。やや粘着性の高い層で、VI層とは漸移しているため境界は不明瞭である。遺物包含層にあたり、最下部に土師期の大部分の床面が設けられている。

IV層…漆黒色土。浅谷域にレンズ状の産状を示す。腐植質で粘性が高く、乾くと薄黒色を呈す。

III層…漸移層。ロームとほぼ同じくらい堅く締っているが、色相がわずかに暗く、また黒色土ブロックがかなり混入している。縄文の生活面は、この層内に介在す



第5図 発掘地点の層序断面図

る。

II層 ローム。黄褐色粘土質ロームで軽石，スコリアは含まない。ややシルト質の部分もあるが概して粘着性は高い。E-3断面には，このロームがほぼ完全に残されているとみられ，粒度から更に4層に分層される。下位から砂質（30

cm), 粘土質 (40cm), シルト質 (30cm), 粘土質 (40cm) で, 最下位の砂質部は I 層との漸移層である。上部は塊状で砂・礫をほとんど含まないところから風成と思われ, また下部はかなり砂礫質になっており水の影響を受けていると推測される。G-101断面に示されるロームは, 下位の粘土質ロームに相当すると考えられる。

I 層…礫層。礫は 1～5 cmの垂円礫 (玉砂利) で, 砂岩・頁岩・粘板岩を主体とする。マトリックスはロームであるが, 砂質の混入が著しい。

浅谷域の堆積はG-101断面に示されるが, ロームが著しく剥脱されている。また「平出」1955, ではローム層を完全に欠き, 浅谷域特有の角礫土層が下位の礫層まで到達しているが, ここでは角礫土層がまったく確認されない。ローム堆積後, 床尾の泉から続くこの浅谷域に流れた河川の浸食により, ロームはその細分された上位2層を欠除されたものと推測される。

表土は概して整然と堆積しており, 著しい層厚変化や層相変化はみられない。縄文期の住居址はローム直上というより, むしろ漸移層中に掘り込まれており, また土師期の住居址は漸移層直上に設けられている。このため層位間隙は時間間隙に比べて極めて小さい印象を受ける。

浅谷域のみに介在する漆黒色土層は, 上下位に特に浸食や攪乱の様子がないところから恒常流水によるものとは考えにくく, 当時おそらく湿潤な状態におかれていたことを物語るものであろう。

(鳥羽嘉彦)

第2節 確認調査の要約

今回の調査は合計44グリッドの発掘を行い, その結果, 11ヶ所のグリッドで遺構の存在が確認された。遺構は住居址及び小竪穴で, 縄文時代と古墳時代から平安時代にかけてのものである。住居址の一部と思われるものが, A-3, A-5, B-6, C-1, C-3, D-4, E-1, I-102, K-102グリッドから, 小竪穴がA-5, D-2グリッドから発見された他, B-2グリッドに性格不明の落ち込みが見られた。

発掘された遺物は, 量的にはあまり多くないが, 縄文時代及び古墳時代から平安時代にかけてのものが得られている。縄文時代に属するものは縄文中期前葉の土器と石棒1, 黒曜石, 栗の炭化物があり, 古墳時代から平安時代のものには, 土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製紡錘車1・鉄滓がある。出土地点・出土地区等の詳細は〔第1表〕を参照して頂きたい。

(直井雅尚)

第1表 地区別遺物出土表

	土 器							石 器					その他	総計
	縄文	弥生	土師	須恵	灰釉	不明	計	打石斧	凹石	黒曜石	その他	計		
A-1							0					0	0	0
3	19					5	24					0	0	24
5			3				3					0	0	3
B-2			4	1			5					0	0	5
4							0					0	0	0
6	129		18	1		5	153	2	2	13		17	0	170
C-1	10		105	8	5	9	137	1		4		5	0	142
3	10		190	8	9		217	2		2		4	0	221
5	2						2					0	0	2
D-2	3		26	1		1	31					0	0	31
4	42					10	52			8	石棒1	9	0	61
6							0					0	0	0
E-1			161	11	1		173					0	0	173
3	6					2	8			3		3	0	11
5							0					0	0	0
F-2	6			3			9					0	0	9
4							0					0	0	0
6							0					0	0	0
G-1	4					1	5					0	0	0
2	27					4	31					0	0	31
101	4		14	1		3	22			2		2	0	24
102	31					20	51			1		1	0	52
103							0					0	0	0
H-2							0					0	0	0
101	12		3			3	18					0	0	18
103							0					0	0	0
105	18		53	6		4	81	1				1	0	82
I-1	2						2			1		1	0	3
2							0					0	0	0
3							0					0	0	0
4							0					0	0	0
5							0					0	0	0
6							0					0	0	0
7							0					0	0	0
101							0					0	0	0
102	3		50	5			58			1		1	0	59
103							0					0	0	0
J-1							0					0	0	0
2							0					0	0	0
101							0					0	0	0
102							0				磨斧1	1	0	1
103							0					0	0	0
K-1							0					0	0	0
101							0					0	0	0
102			3	1			4				錘石8	8	0	12
103							0					0	0	0

第三章 遺構・遺物

(1) A-3 検出遺構

遺構(第6図) 本グリッドは、今回調査区域の中では最も南側、つまり北の山寄りの地域に位置する。表土を除去し、褐色土を掘り下げると、ローム面に褐色土の落ち込みがみられ、遺構の存在が確認された。落ち込みを掘り下げるとローム面が堅く踏み固められている床に達し、この遺構が住居址であることが判明した。

検出された部分は西壁と床面の一部である。調査部分が住居址のごく一部であったため住居址全体のプラン等ははっきりさせることはできなかった。壁は垂直に掘り込まれ、遺存状態は非常に良い。壁高は40cmを計る。壁下には幅14~20cm、深さ6cmの周溝がある。床面は平坦、堅緻でしっかりした床である。調査範囲内には2ヶ所のピットが検出されたが、ともに13~15cmと浅く、支柱穴とは考えられないものである。

遺物の出土は多くなく、しかも出土したわずかな遺物は覆土上層のものが大半を占め直接住居に伴うものはほとんど発見されなかった。土器片から本址は古墳時代に属しよう。

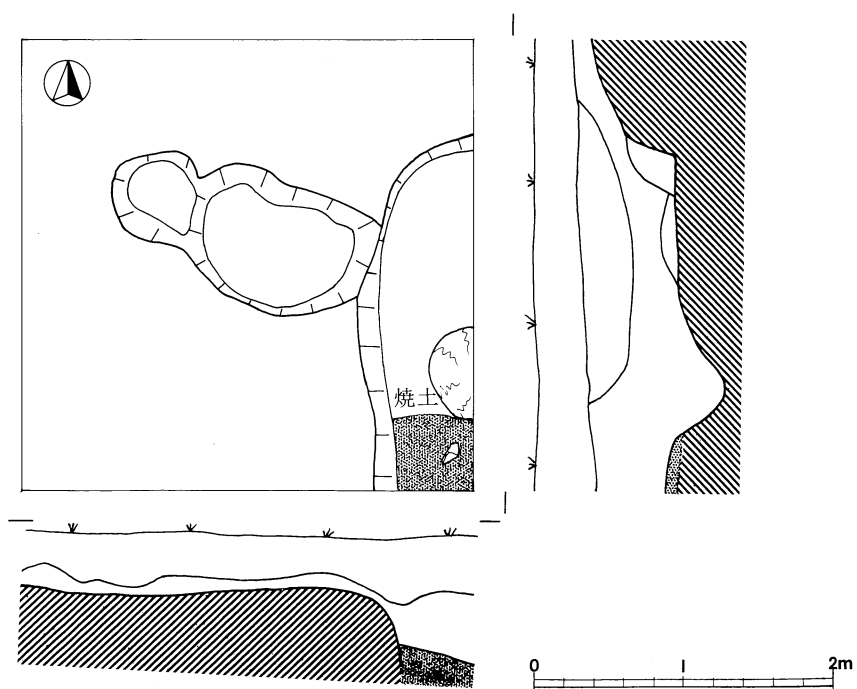
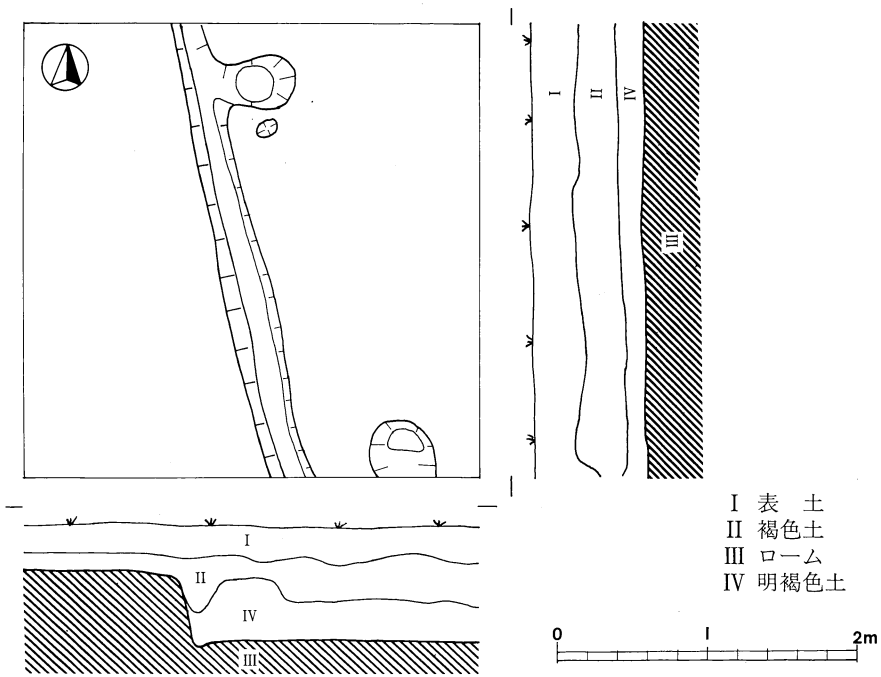
遺物(第11図1) 出土遺物は少ない。わずかに土師器甕、内黒環、須恵器甕の土器片と石製品が出土したにすぎない。土器はいずれも破片のため図示不能である。石製品は、粘板岩製で、2孔を有している。直径0.6cmの孔を一方向からのみ穿孔している。器面は研磨が施され、厚さは0.8cm前後である。その用途は判然としない。(小林康男・篠宮 正)

(2) A-5 検出遺構

遺構(第6図) 調査区南端に位置し、検出においてまずグリッド北部に小竪穴が確認され、ついで東端に黒色土の落ち込みが確認された。東端の落ち込みは掘り下げにより床面が確認され住居址であることが判明した。

住居址のプランは北西部のコーナーにより隅丸方形と考えられるが大きさはわからない。覆土は黒褐色土であり、その上に黒色土のわずかに混入する黄褐色土がレンズ状にはいつていた。全体的にその粘性は乏しいものであった。

壁についてはローム層を垂直に掘り込んであったため確認は容易だったが、北西部は攪乱により上部が削られていた。床は平坦で北部において比較的堅いしっかりした床が、その他では軟弱な床が検出された。カマドは全体を確認することはできなかったが、南部の灰白色の粘土の部分がそれに当たる。粘土は南から北へゆるやかに傾斜しており厚いところでは10cm程度であった。また中央に15cm程度の石が粘土にはいりこんでおりこの付近



第6図 A-3 検出遺構 (上), A-5 検出遺構 (下)

に遺物が集中していた。

ピットは直径1 m程度の円形をなすと考えられ西端より土器底部が検出された他は遺物はなかった。

小竪穴はほぼ垂直にロームを掘り込んであり、内部は2段になっており底は水平だった。また小竪穴と住居址の新旧関係は遺物から判断して小竪穴が縄文時代のものであり古いと考えられる。
(大竹庄司)

遺物 土器(第11図) 出土遺物は少ない。灰釉陶器皿片、須恵器甕片、土師器甕、坏、小形壺等がある。1～3はカマド周辺から出土している。2は土師器甕形土器で、頸部のすぼまりは少ない。口径15.8cm、器厚は0.4～0.5cm前後である。口縁部は横撫でを行っている。茶褐色を呈し、砂が目立ち、焼成は良好である。3は小形壺形土器で、最大径が胴中央部にあり、短く真直ぐ立上った頸を有している。口径9.2cm、器高10.8cmである。外面は横あるいは斜めのへら磨きが丁寧に行われている。赤褐色を呈し、砂粒も少く、焼成は良好である。4は口縁が大きく開く坏であり、口径17.6cm、器高3.3cmである。調整は不明で、淡褐色を呈し、胎土焼成とも良好である。古墳時代のもと考えられる。

(篠宮 正)

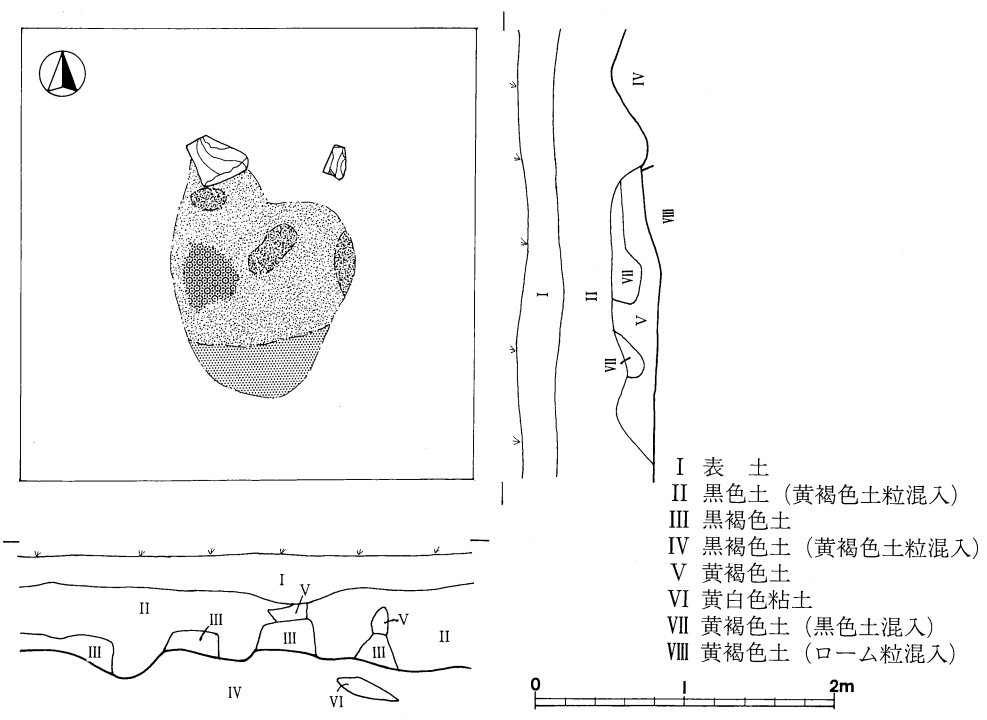
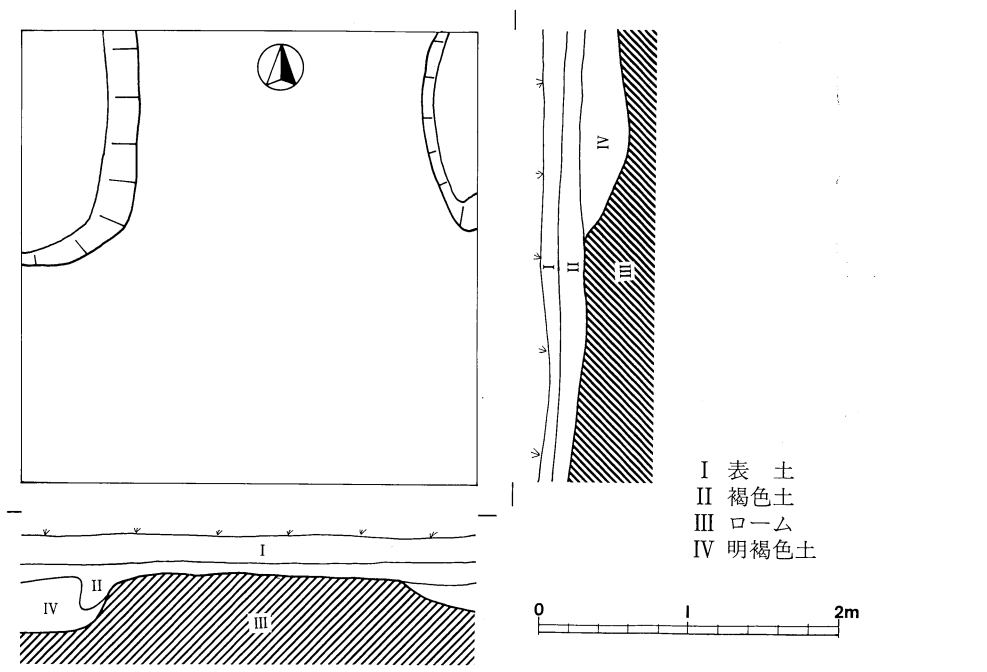
(3) B-2 検出遺構

遺構(第7図) 本グリッドは25cm程掘り下げたところで平坦なローム面に達し、北西及び北東隅に明褐色土の落ち込みが検出された。いずれもグリッド外にかかり、全景は捉え得なかったので、どの様な遺構か不明である。北西隅のもの掘り込みは35～40cmを測りしっかりしたもので、底面は平坦で、一見、住居址の床面状を呈すが軟弱である。北東隅のものは緩やかな傾斜で底部に至り、中央部で約35cmの深さをもつ。両者とも明褐色土が単層で堆積していた。めぼしい遺物の出土はなかった。北西端の落ち込みは住居址の一部である可能性が高い。
(直井雅尚)

(4) B-6 検出遺構

遺構(第7図) 本グリッドは今回調査区域中南西隅にあり、検出された遺構中最も西側に位置する。表土層を除去すると褐色土に黄褐色土が混入した土層となり、更に黒褐色土が続く。表土層から74cmほど掘り下げた所、土器が集中して出土し、焼土が散布している面が現われ、住居址と推定された。

検出された住居址は、調査グリッド内に壁が発見できなかったため、プランは不明である。床面と思われる踏み固められた面も判然とせず、調査区域内では140×120cmの楕円形に焼土、炭化物が散布する炉址と思われるものが唯一の施設といえる。この炉址と思われ



第7図 B-2 検出遺構 (上), B-6 検出遺構 (下)

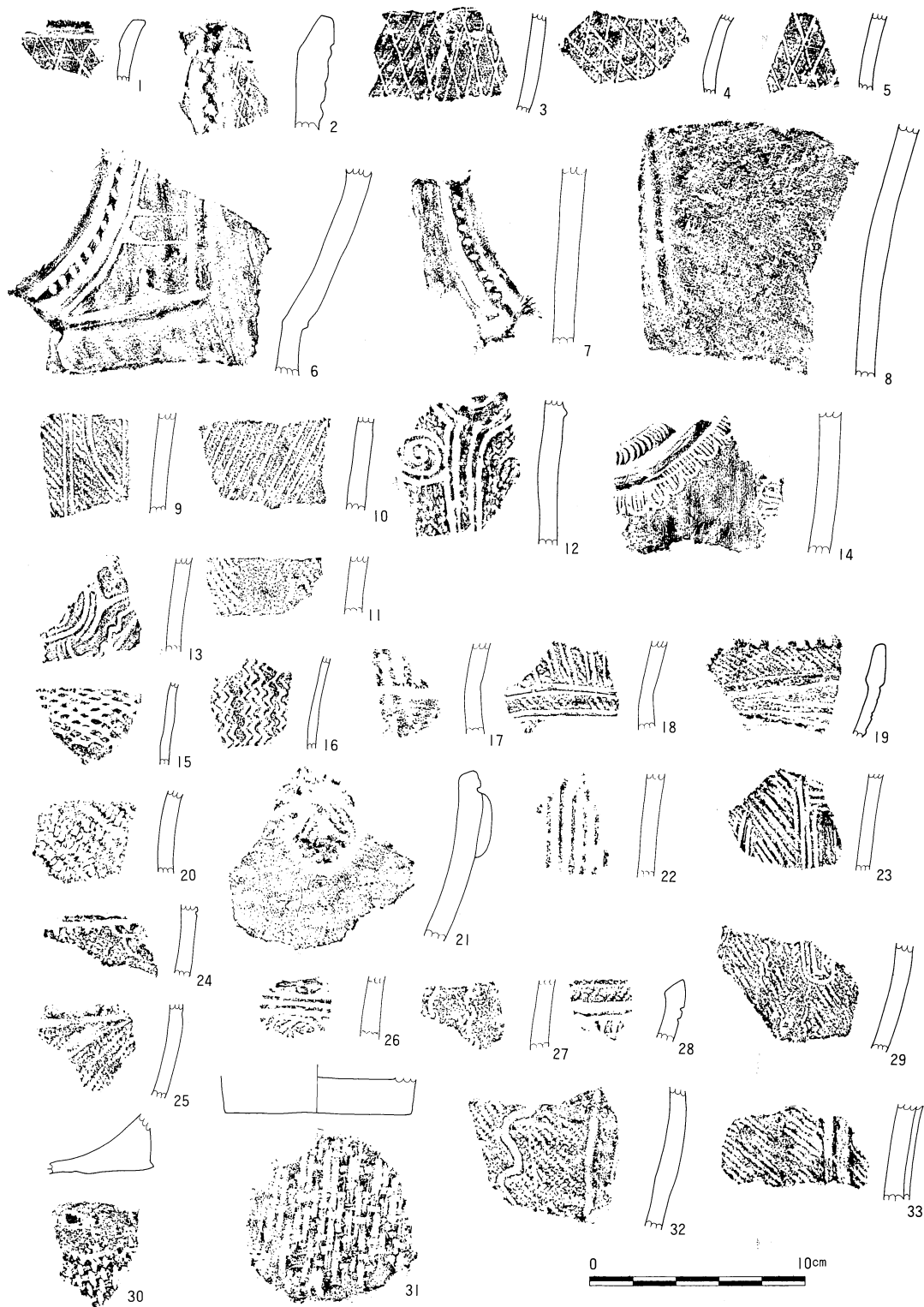
る焼土面はローム面よりかなり上位の黄褐色土中にあり、まだ下位にも遺構の存在が予想されるが、今回は一応焼土面で調査を打ち切りとした。

土器は炉址を中心にかなりまとまって出土し、石器も含まれている。焼土面からは縄文中期九兵衛尾根式が集中的に出土したが、これより上位からは土師器、須恵器が発見されている。本グリッド検出住居址は縄文中期九兵衛尾根期に属するものと思われる。

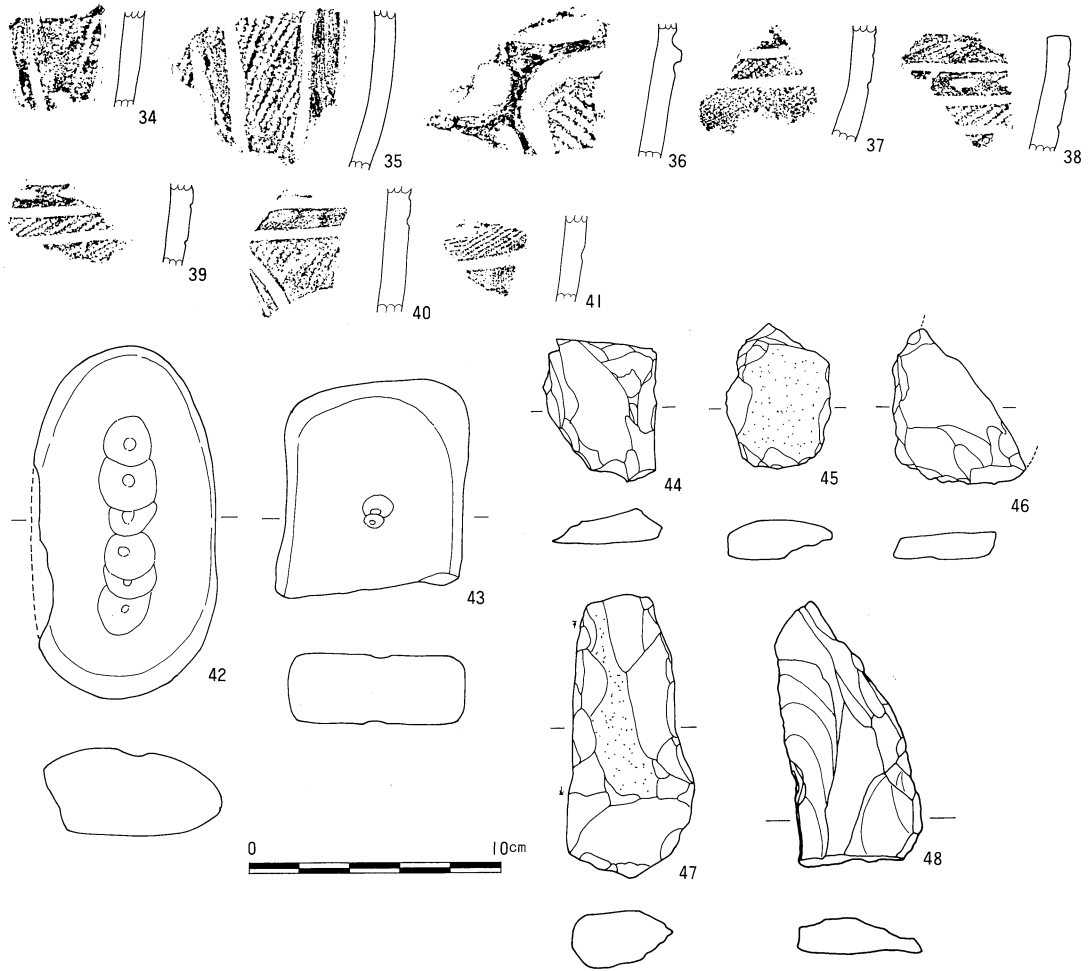
遺物 土器 縄文時代(第8図) 出土土器は129片と多かったが、完形及び復元できるものはなく、すべて破片であった。

12は、深鉢の破片で、口縁部には山状の小突起を持ち、突起部には懸垂する短かい押圧隆帯を貼付している。地文は全面RLの縄文で、口縁部には交互に4本の半截竹管状工具の腹部による平行沈線で波状文と直線を横位に施文し、口縁下部～胴部には同じ工具、手法で懸垂文を施文している。器形は平出第3類Aに類似するが、平出第3類Aよりは器厚が厚い。2は波状口縁となり、波状部には懸垂する押圧隆帯を貼付し、口縁部にはへら状工具による沈線で格子目文を施文している。6～8は大きな波状口縁の深鉢で波状部は阿玉台式に多い扇形に近似する形である。口縁部には口縁部に沿って、棒状工具による押圧隆帯と波状部からはじまる鉤状の隆帯を貼付し、区画文をなしている。区画の中には棒状工具、へら工具による三叉文、連続する契形文を施文している。胴部には、モチーフははっきりとしないが隆帯を貼付している。これに類似する土器は、岡谷市船霊社遺跡(樋口他・1980年)、原村大石遺跡(伴他・1976年)などに見られ、阿玉台式の様相が強いIb期の土器である。9は深鉢の胴部の破片で地文にLRの縄文を、その上半截竹管状工具による平行沈線を施文している。10は半截竹管状工具による平行沈線を施文した深鉢の破片である。11はLRの縄文を縦位回転させ施文した深鉢胴部破片である。12は隆帯を貼付し、棒状工具が半截竹管状工具の背により隆帯にそった沈線や沈線で渦巻文を施文し、まわりには半截竹管状工具の腹部により連続する刺突文を施文している。13・14は、上層出土のものであるが、棒状工具により直線や曲線の沈線、三叉文などを施文し、隆帯を貼付しその上に爪形文を施文し、沈線や隆帯のまわりには櫛状工具か半截竹管状工具により横に連続する沈線を施文しそのまわりには半截竹管状工具を押しつけ、半円状の文様を連続して描出している。本址出土の縄文土器は19を除きIb期の新しい部分の土器で、19はIVa期の土器である。(島田哲男)

古墳時代(第11図) 出土遺物は多い。土師器小形壺、甕、高坏、須恵器坏、甕片等である。5は土師器小形壺で、口径19.7cm、器高11.4cmで頸部が強く折れる丸底の壺である。底部は厚く1.2cmを測る。底部はへらミガキを行い、胴内外はへら削りの後撫でを行って



第 8 図 各グリット出土の縄文土器



第9図 各グリット出土の縄文土器・石器

る。淡褐色を呈し、少量砂粒を含み、焼成は良好である。6は須恵器坏身で、受部は水平にのび、鋭く、たちあがりはずかに内傾している。ヘラ削りは $\frac{2}{3}$ を右回転の回転ヘラ削りを行い、その他は横撫で調整を行っている。最大径は11.8cmである。青灰色を呈し、断面は赤褐色を呈している。少量砂粒を含み焼成は良好である。これらは5世紀後半に属するものである。
(篠宮 正)

石器(第9図) 出土石器は凹石2、打製石斧2の計4点がある。凹石42は楕円形の礫を用い、表面に6孔を、裏面に3孔を有する。475g。礫岩製43は半欠品であるが表裏面に小孔をもつ。319g、細粒砂岩製。打製石斧44・45ともに残欠品。44は51g、頁岩製、45は44g、頁岩製。
(小林康男)

(5) C-1 検出遺構

遺構(第10図) 本グリッドは確認調査区域の南部分のうち東端に位置する。表土以下から、土師器、須恵器、灰釉陶器の小破片がかなり出土したこと、また他グリッドと比べて、黒褐色土層が厚かったことなどから、当初より遺構が存在することが予想された。遺構を確認すべく掘り進められたが、その時点ではプランその他は確認できなかった。地表下約80cmで床面が検出されて、遺構の存在が確認された。住居址と考えられるが、壁は東側の極く一部が確認されたのみであり、プランは全く判然としない。その壁は高さ35cmで、ほぼ垂直に掘られている。床面は平坦で良く踏み固められ、非常に堅緻、良好であるが、北半分は他部より5cm程低く、軟弱である。その部分には焼土が混入していた。ピットは、P₁(-15cm)、P₂(-25)、P₃(-25)、P₄(-30)の4ヶ所確認された。P₁は中央部分が5cm程高くなっている。P₂は底部に20cm程の角礫が密着し、その上に2個の石が存在していた。P₄は全体が確認されておらず、未確認部分へ続くものと思われる。その内部には焼土がかなり混入していたが、性格は不明である。周溝は東壁の一部に接して確認された。深さ8cm幅10~15cmである。

遺物の出土状態は、黒褐色土の第II層下部に多く、平面的には、南西部分には少ない。

なお、P₁の中央部、わずかに高くなった部分にベンガラの塊が出土し、P₁とP₂の間中部から、鉄製紡錘車と鉄滓が出土した。またP₁、P₂付近で4点の炭化材が確認されている。

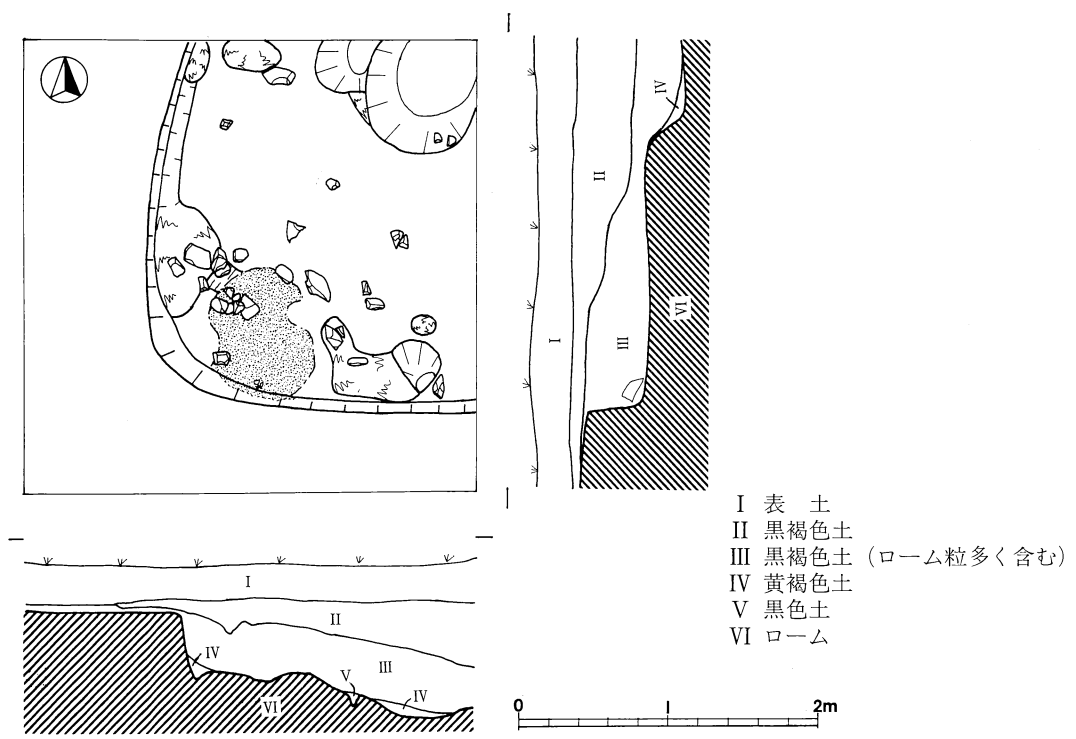
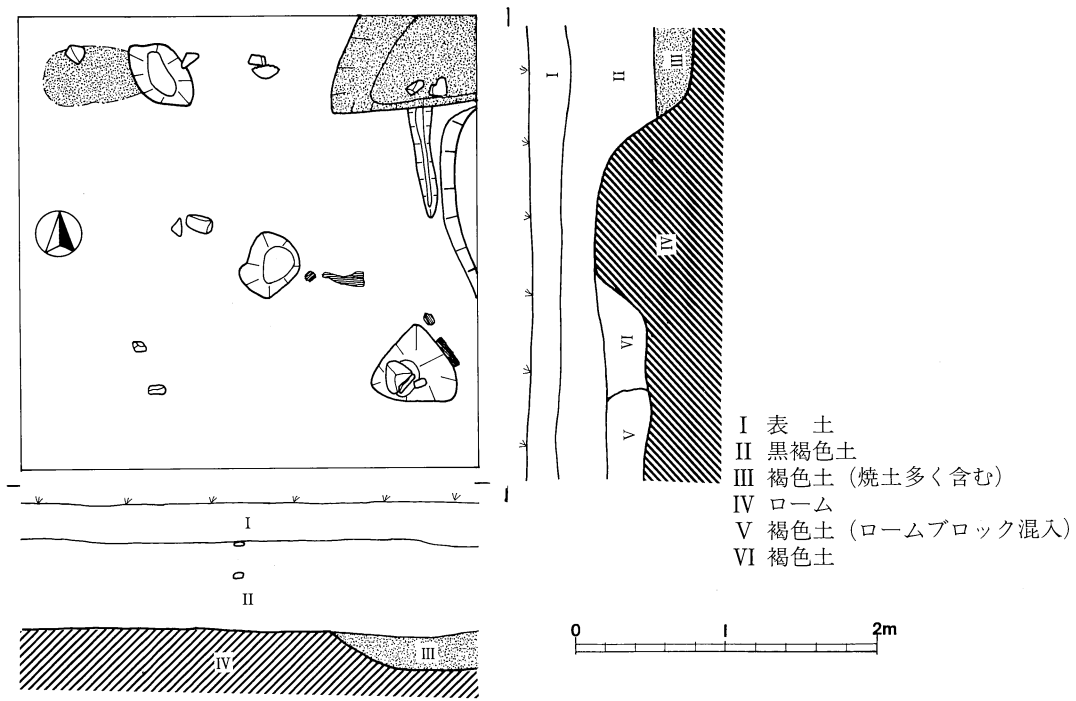
(込山秀一)

遺物 土器(第11図) 出土遺物は多く、土師器坏、甕、須恵器高坏、甕、壺、灰釉陶器、緑釉陶器碗等が出土している。7は高坏の破片で内外ともにロクロナデを行っている。灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。8は、灰釉陶器碗で口径12.5cm、高台径6.7cm、器高4.2cmである。底部は糸切の後、胴中央部までへら削りを行い、高台を付けている。内面は丁寧なナデを行っている。灰白色を呈し釉は薄く光沢はない、胎土は微砂を少量含み焼成は良好である。9は緑釉陶器底部破片である。内外緑色の釉がかかっているが、ほとんどおちている。高台径は8.0cmで外反している。底部はへら削りを行い、後ナデを行っている。焼成、胎土とも良好である。8・9は11世紀に属しよう。

石器(第9図) 打製石斧の刃部が1点出土している。(篠宮 正)

(6) C-3 検出遺構

遺構(第10図) C-3グリッドのI層黒褐色土(耕作土)を30cm掘り下げたところでローム面に達し、黒褐色土の落ち込みを検出した。それを掘り下げた結果、本グリッドに西壁~南壁のコーナーと西壁、南壁の両壁半分づつを持つ平安時代後期の住居址であること



第10図 C-1 検出遺構 (上), C-3 検出遺構 (下)

を確認した。

住居址はコーナーの形から方形を呈すると思われる。埋土はⅡ層が黒褐色で住居址の中心に向い傾斜している。Ⅲ層はローム粒を多く含む黒褐色土で床面まで達している。壁際及び周溝内には黄褐色土が見られた。カマドは南壁コーナー近くに84×60cmの範囲で焼土が見られた。焼土の周囲および住居址内には人頭大～拳大の石が散乱しており、焼土の周縁には粘土塊、粘土粒が見られたので石組で粘土を被った石組粘土製のカマドであったと思われる。壁はローム層を掘り込んだもので、壁高は西、南両壁とも40cmとほぼ垂直に掘り込み、しっかりとしていた。床面は平坦で堅緻で良好であった。西壁際には幅12cmの周溝が検出された。柱穴と思われるピットは見られないが、所々に深さ10cmのピットが検出された。これが柱穴であったとも考えられる。また、グリッドの北東、本住居址の中央部にあたる部分からは90×80cmの楕円形になると推定される深さ28cmのピットが掘られていた。ピットには貼床されたと思われる部分も検出されず、ピット内の埋土も住居址の埋土のⅢ層ローム粒を多く含む黒褐色土であったので本住居に付属した施設であったと思われる。

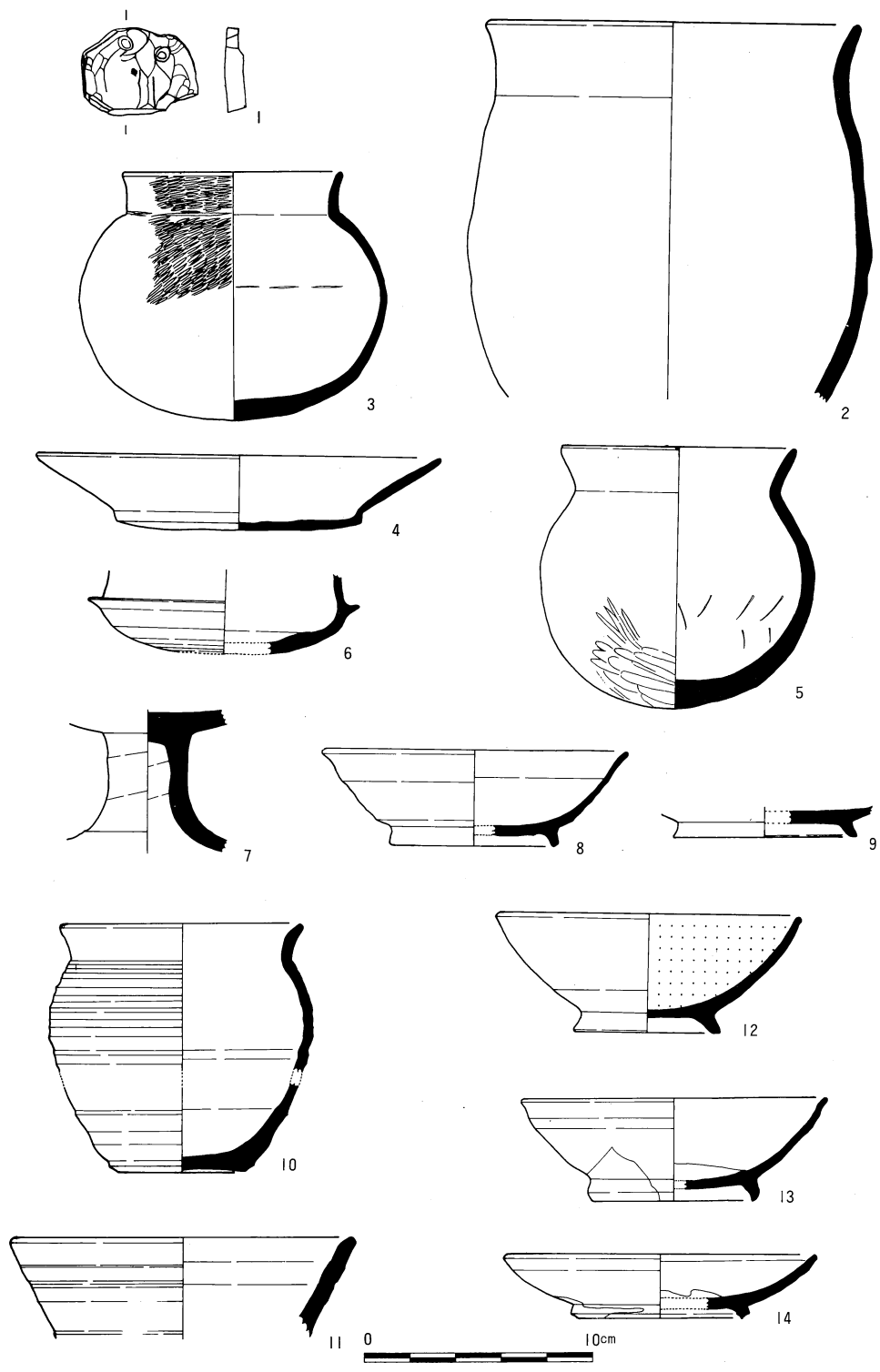
遺物の出土状態はカマド内及び周辺に集中していた。完形のものではなくてすべて破片で、土師器坏、甕の破片20片、灰釉陶器片2片、計22片が床面から出土した。

本址は平安時代後期に属する住居址である。

(島田哲男)

遺物 土器 (第11図) 出土遺物は多く、土師器坏、甕、小形甕、須恵器甕、灰釉陶器碗、皿が出土している。10は小形甕で口径9.5cm、底径4.8cm、器高10.8cmで最大径が胴上部にある。胴上部は荒いカキ目調整を行い他は内外ともにロクロナデを行っている。外面に一部ススが付着している。茶褐色を呈し、砂を含み、焼成は良好である。11は土師器坏で、口径は14.6cmである。全体に厚くロクロナデの痕跡が明瞭である。茶褐色を呈し、砂が目立ち、焼成は良好である。12は高台付の内面黒色土器である。口径13.2cm高台径6.2cm、器高5.2cmである。淡褐色を呈し、胎土焼成とも良好である。13は灰釉陶器碗である。口径13.2cm、高台径7.0cm、器高4.5cmである。高台は内湾している。胴上部までへら削りを行い、高台を付けた後、ナデている。釉は灰白色で一部光沢がある。胎土、焼成とも良好である。14は灰釉陶器皿で口径13.4cm、底径7.2cm、器高2.8cmである。胴部はへら削りを行い、高台をはり付けた後でナデを行っている。釉は白色で光沢はない。胎土焼成とも良好である。これらは11世紀に属するものである。

石器 (第9図) 打製石斧2点が出土している。47は刃部の一部を欠くが、短冊形を呈し、左辺に磨耗痕を残す。緑色凝灰岩製、153g。48は、刃部を欠く粗雑な石斧である。頁



第11図 各グリット出土の土師器・須恵器・灰釉陶器

岩製，81g。

(篠宮 正)

(7) D-2 検出遺構

遺構(第12図) 本グリッドは今回調査区域中の南に寄った地域に位置する。表土を除去すると、II層暗褐色土が、III層褐色土に落ち込んでいた。調査の結果、小竪穴であることが確認された。グリッド北東隅に検出されている。

小竪穴は、重複して東西に2ヶ所検出された。西側のものは80×70cmの楕円形で、深さ45cmの規模をもち、ほぼ垂直に掘り込まれている。東側の小竪穴は、その大半が西側の小竪穴に切られているため詳細は明確にし得ないが、110×70cmほどの楕円形を呈するものと思われる。内部には拳大の焼石と、その下に少量の炭化物が発見された。

遺物は、小竪穴周辺のものも含めて計13点出土したが、全て小さな土器片であった。これらの土器片で時期が判明できるものは大半が九兵衛尾根式に属するものであることから、小竪穴の時期もおよそこの頃に比定され得るものと思われる。

(小林康男)

遺物 土器(第13図) 1, 2とも土師器坏形土器である。1は口径14.4cm器高5.2cmで口縁が大きく開いた丸底の土器である。内外とも丁寧なヘラミガキ調整を行い底部はヘラ削りを行っている。茶褐色を呈し、少量砂を含み、焼成は良好である。2は口径10.8cm, 器高5.3cmで深めの坏である。内面は黒色処理をし、ヘラミガキを行っている。外面は口縁部はヘラミガキを行い、底部はヘラ削りを行っている。底部は1.3cmで厚く、暗褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。6世紀に比定される。

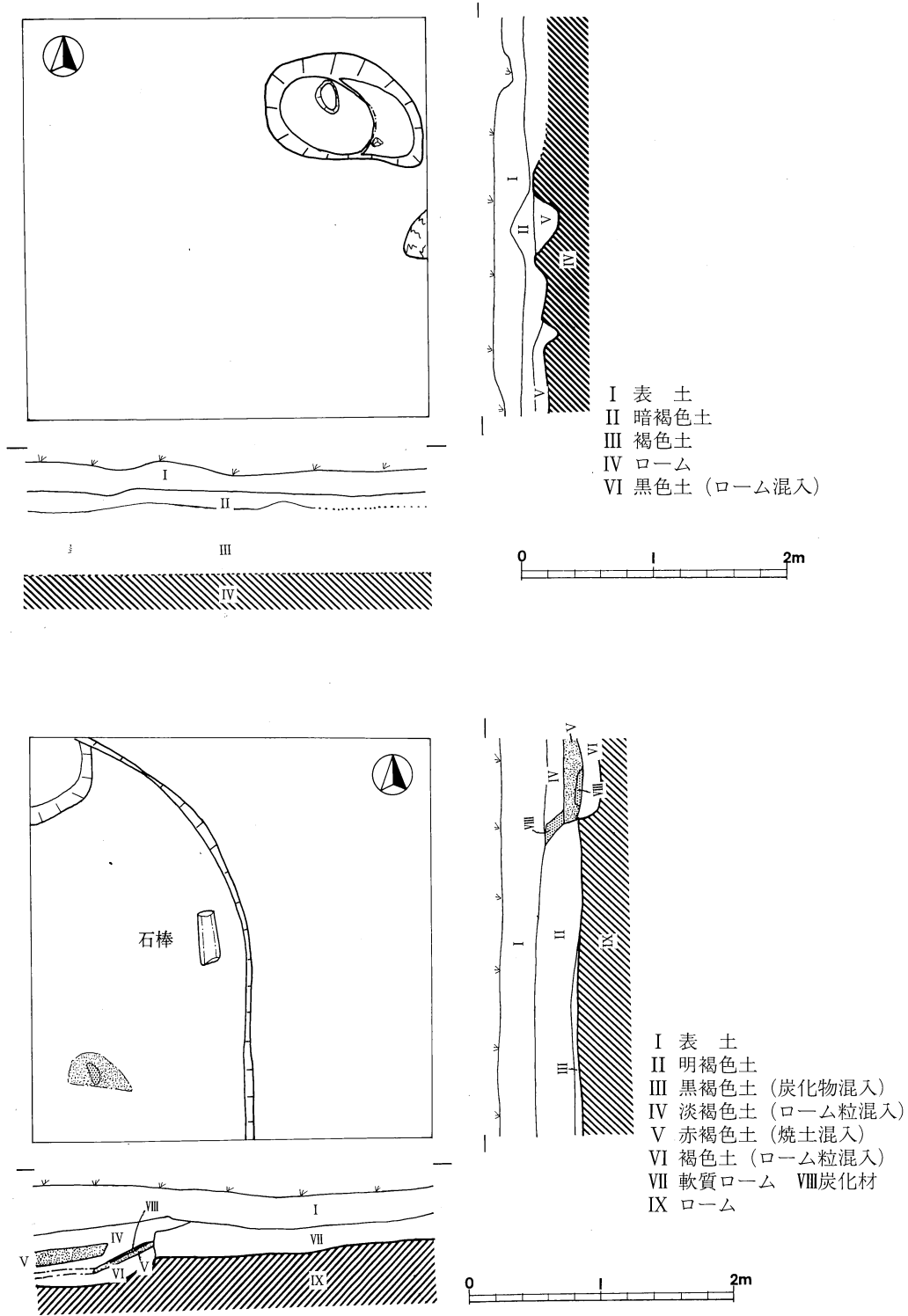
(篠宮 正)

(8) D-4 検出遺構

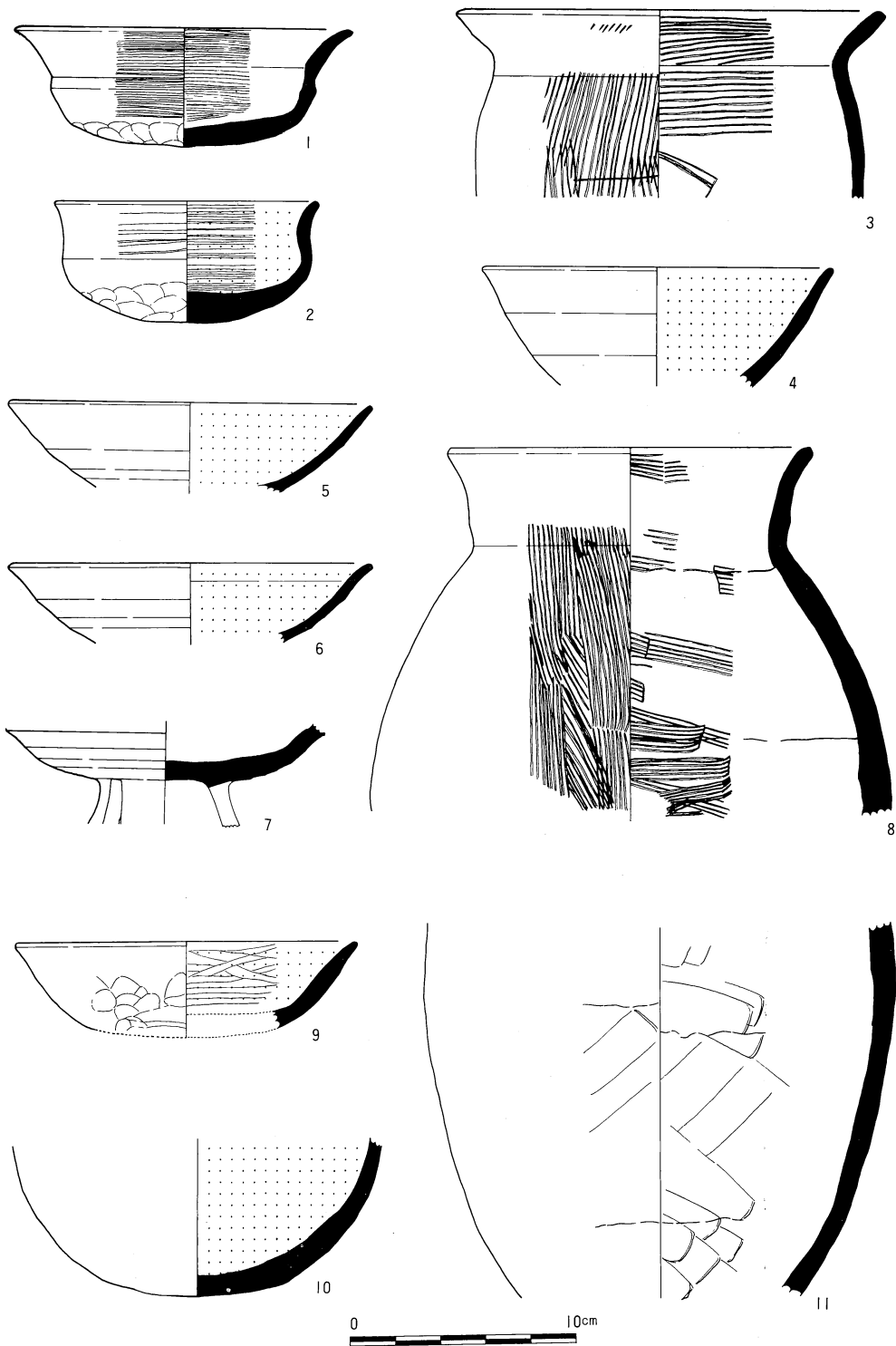
遺構(第12図) 本グリッドは南区のちょうど中央部分に位置する。表土層、褐色土層を掘り下げると、ローム上に土器の集中出土個所があり、その下に床面が現われたためその住居址の存在が確認された。

住居址は東壁と床面の一部が検出された。壁は7～8cmと低く、垂直に掘り込まれている。壁の状態から推定すると本址のプランは直径4～5mの円形を呈するものであろう。床面はローム上に構築され、ほぼ平坦で、中央部分でやや硬くなるが壁際は軟弱である。床面上には炭化物、焼土が散在し、特に南側にはかなりのまとまりとなっている。床面全般に認められることから焼失家屋と思われる。住居北側には直径20～30cm、深さ40～85cmの二段にわたる落ち込みが発見された。この他、特記されることは、壁際に石棒が出土したことである。床面から若干浮いて、横倒しの状態で発見された。また第14図の土器も床面に横転し、中には多量のクリの炭化物が包蔵されていた。本址は九兵衛尾根期に属する。

(深井幸人)



第12図 D-2 検出遺構 (上), D-4 検出遺構 (下)



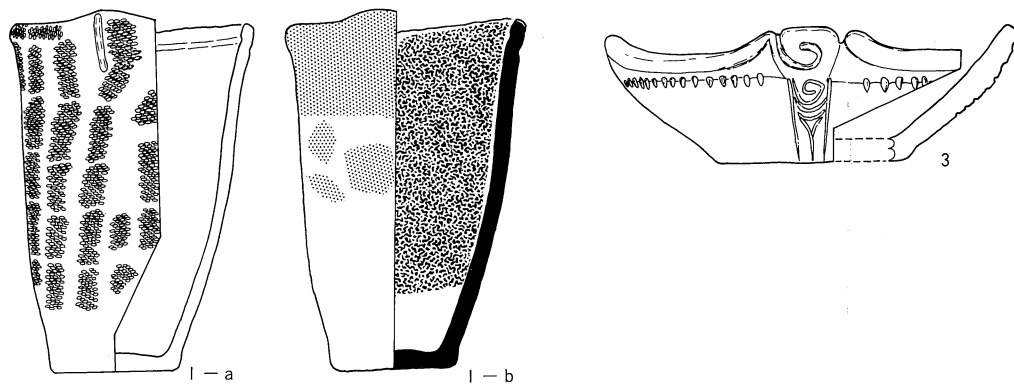
第13図 各グリット出土の土師器・須恵器・灰釉陶器



遺物 土器(第14図) 出土土器は完形品1, 図上復元したもの2, 土器片40片と少なかった。

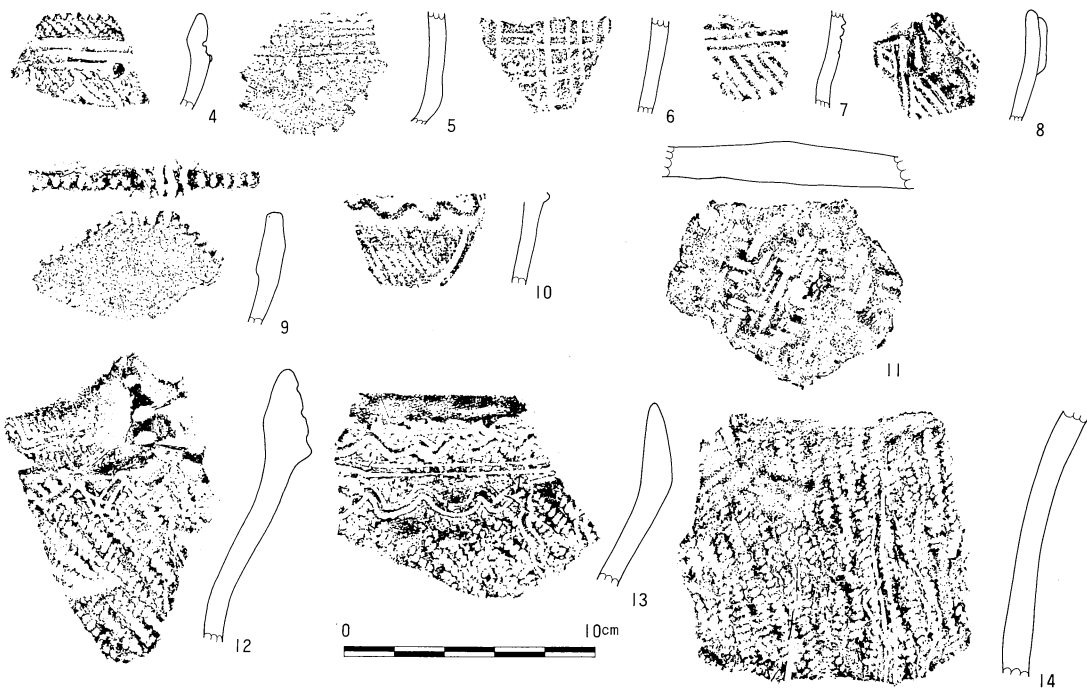
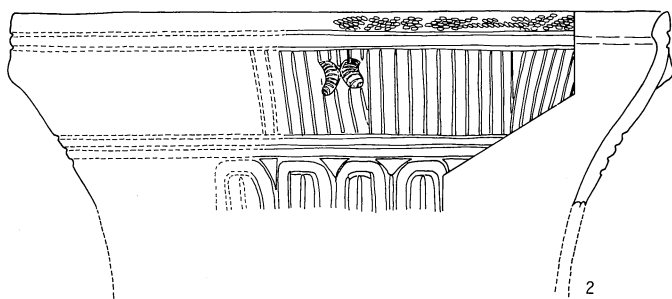
1は南壁際の床面から横たわりつぶれた形で出土した完形品。底部から口縁部にむかってやや開く円筒形の深鉢で口縁部には1ヶの山形の突起が見られる。口縁端部には棒状工具によるきざみが見られる。全面にLRの縦位回転の縄文が施文されている。突起の部分には短い隆線を縦に貼付けている。この土器には明瞭な使用痕(スス・炭化物)が残り(図1-B)栗がつまった感じで出土していることから、栗の調理に使用されたものと考えられ、調理の寸前に火災等の理由により廃棄されてしまったものと思われる。2・3は床面から出土したもので図上復元したものである。2は、口縁部に向って開き、口縁部がやや内湾する深鉢で、口縁部にはRLの縄文を転がし、他は半截竹管状工具で半隆起線を口縁部には横位、縦位に胴部には逆U字形に施文している。胴部の逆U字の重なる間の上部にはへら状工具により三叉文を施文している。口縁部には隆線をX字状に貼付け半截竹管状工具の腹部による爪形文を施文している。半截竹管状工具の施文は上から順番に施文しており、口縁部の縦位の線は左から右へ施文している。3は底部から口縁部に向かって直線的に開く山形の浅鉢で、波状口縁を呈する。波状になる部分には棒状工具により渦巻文を施文している。口縁部には、へら状工具により波状の間に渦巻文をはさむように連結した三叉文を施文し、その下に棒状工具による刺突文を施文している。波状になる部分の胴部にはへら状工具による沈線の渦巻文や三叉文を組み合わせた懸垂文を施文している。4はRLの縄文とし棒状工具により沈線を施文し口縁端部にはきざみを施文している。5は半截竹管状工具の背部により連続する刺突文を施文している。6・7は半截竹管状工具の腹部により平行沈線を施文している。8は半截竹管状工具の腹部による平行沈線、結節沈線を施文し、口縁部にレンズ状の隆帯を貼付している。9は波状口縁の3に類似する浅鉢の口縁部である。胴部は無文と思われ、口縁部には棒状工具によるきざみが施文されている。10は深鉢胴部でLRの縄文を地文とし、半截竹管状工具の腹部による弧状のモチーフの平行沈線を施文し、波状の隆線を貼付している。11は網代痕のついた底部である。本址の土器は平出縄文中期I期bの古い段階のものと考えられる。(島田哲男)

(9) E-1 検出遺構

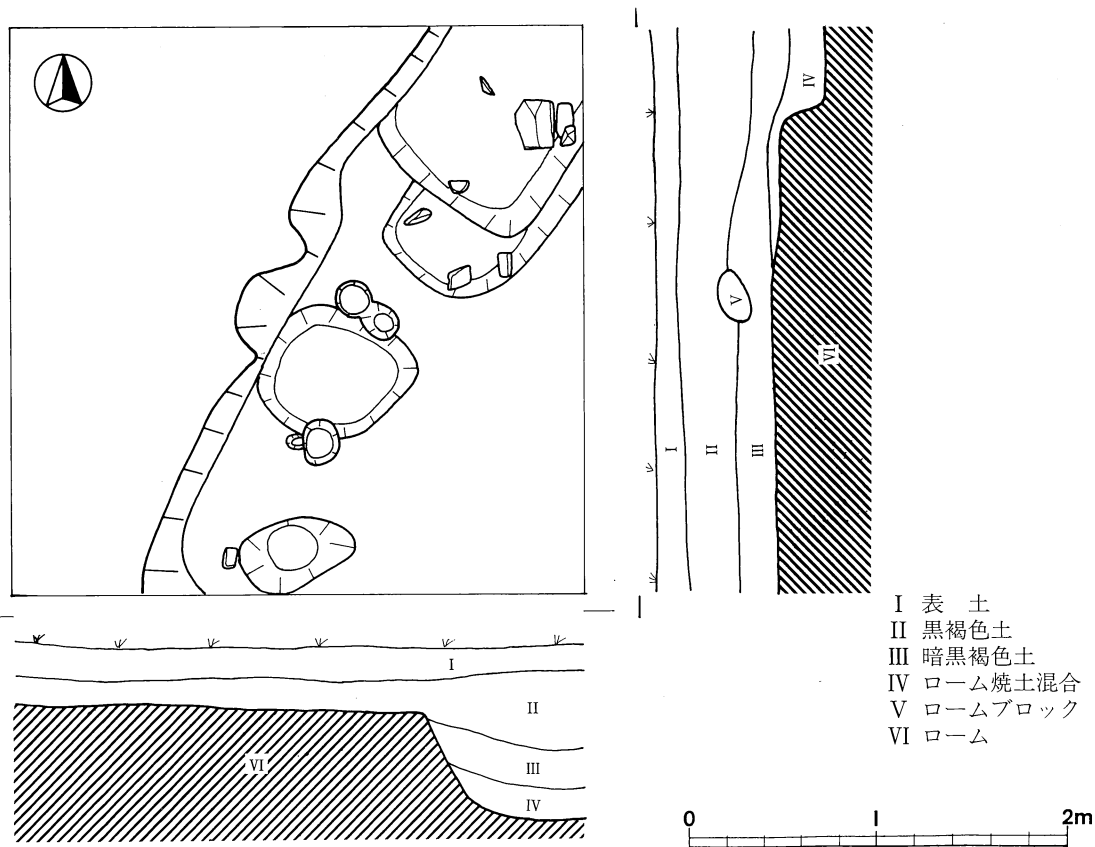
遺構(第15図) E-1を35cm掘り下げたローム面において、プランを確認した。壁は西壁の一部を検出し、南端においてコーナーと考えられる曲りもみられた。壁高30cm前後で、軟らかであり、傾斜している。床は平坦で、壁際を除いて堅緻である。柱穴はコーナー付近にあるP₁は60×34cmの楕円形を呈し、深さ30cmで外に向って傾斜している。P₂~P₄



 炭化物付着 (お蕉)
 スス



第14図 D-4 検出遺構出土土器



第15図 E-1 検出遺構

はカマド南側にあり、直径20cm程度の円形を呈し、深さは19~23cmである。このP₂~P₄をとり囲み深さ10cmの窪みがある。カマドは残りが悪く、拳大から頭大の石が8個散乱し、掘込みは深さ31cmで、焼土粒を含んでいた。

以上本遺構は規模不明であるが、西壁に石を中心としたカマドを持つ隅丸方形の竪穴住居址である。

遺物 土器 (第13図) カマド周辺を中心として多量に遺物を出土している。土師器甕、坏、須恵器甕、坏等である。3は土師器甕で口径17.0cmで口縁が大きく開いている。外面は縦方向の刷毛目で、内面はカキ目で調整している。茶褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成は良好である。外面にススが付着している。4~6は内黒の坏で内外とも丁寧に仕上げている。口径は4が15.1cm、5・6が15.6cmでいずれも底部を欠いている。いずれも茶褐色で、焼土、焼成とも良好である。10世紀後半に比定される。(篠宮 正)

(10) I-102 検出遺構

遺構 (第16図) I-102を掘り下げた所、耕作の攪乱が著しかったが、西端部において

壁の一部を確認した。壁高は45cmで、やや傾きがあるがほぼ垂直で、堅く良好である。床は全体に軟らかく、カマドの両側は5cm程高く堅い。カマドは西壁にある。55×55cmで深さ15cmの掘方があり、赤褐色に焼けた焼土が12cm堆積していた。また、両側は青灰色の粘土が12cm堆積していた。カマド北側に65×40cm、深さ25cmの長方形の小堅穴があり、底部は堅くない。柱穴は1本あり、小堅穴の東側にある。直径12cm、深さ40cmで、ほぼ垂直にあいている。周溝は壁に沿ってあり、幅8cm深さ10cmである。

以上本遺構は、規模不明であるが、西壁に粘土カマドを持つ堅穴住居址である。

遺物 土器(第13図) 出土遺物が多い。土師器甕、坏等が出土している。9は坏で内面黒色土器である。内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りを行っている。口径14.0cm、器厚0.7cm前後である。淡褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良好である。10は、壺の底部で内面黒色土器である。淡褐色を呈し、砂が目立ち、焼成は良好である。奈良時代のものであろう。

(篠宮 正)

(1) K-102検出遺構

遺構(第16図) 本址は調査区北端の北から南へ大きく傾斜する地点の最も高いところに位置し、検出において東部に明確な黒色土の落ち込みが確認された。

今回の調査では住居址のごく一部が確認されたにすぎないためプランについては不明である。壁はロームを垂直に掘り込んでおり、しっかりした壁が検出された。また壁上面は北から南へゆるやかに傾斜していた。

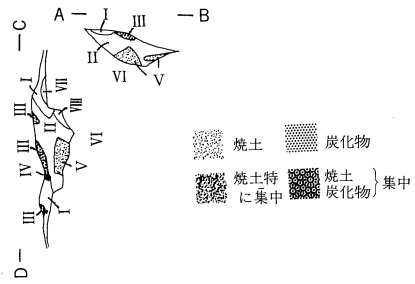
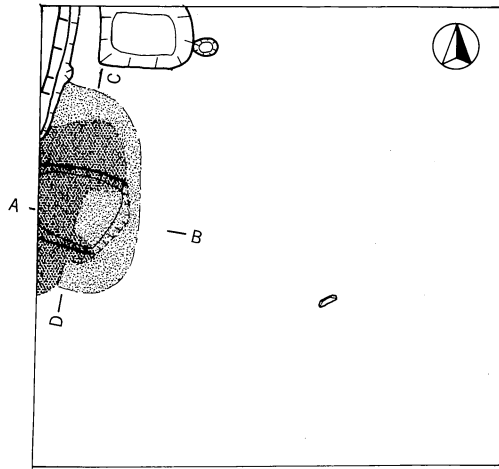
床は中央ベルト状に多少くぼんでいる軟弱なところを除き平坦であり、よくふみしめられた堅い床であった。そして床面も壁上面と同様に北から南へゆるやかな傾斜をなしていた。なお中央やや北の壁付近に灰白色の粘土がわずかに確認された。

カマドについてはほんの一部が確認されたにすぎないが北部の焼土の部分と考えられ、遺物が集中していた。焼土は10cm程度の厚さでありその中央に石がやや南向きに立っているのが確認された。

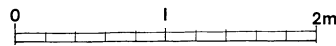
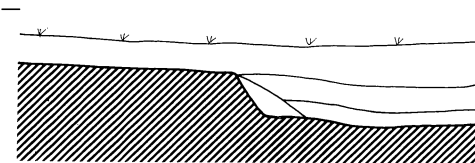
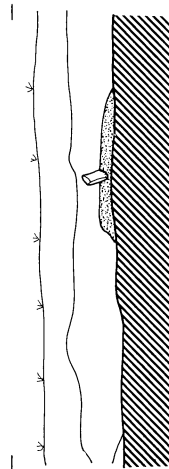
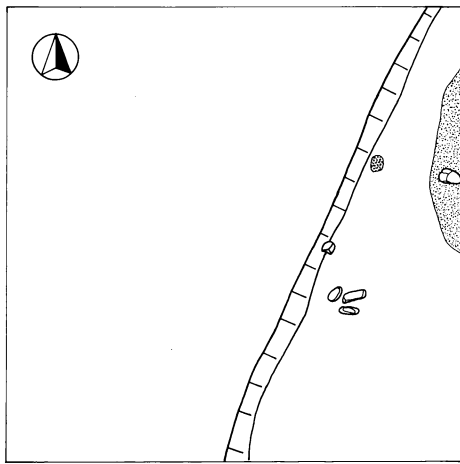
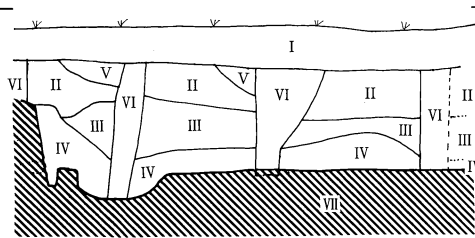
本址で注目されるのは中央の軟弱な床の壁付近に錘り石が集中して検出されたことである。石の大きさは13cm程度で重さもほぼ均等で角がおとされて丸みをおびていた。錘り石は全部で8点検出された。

(大竹庄司)

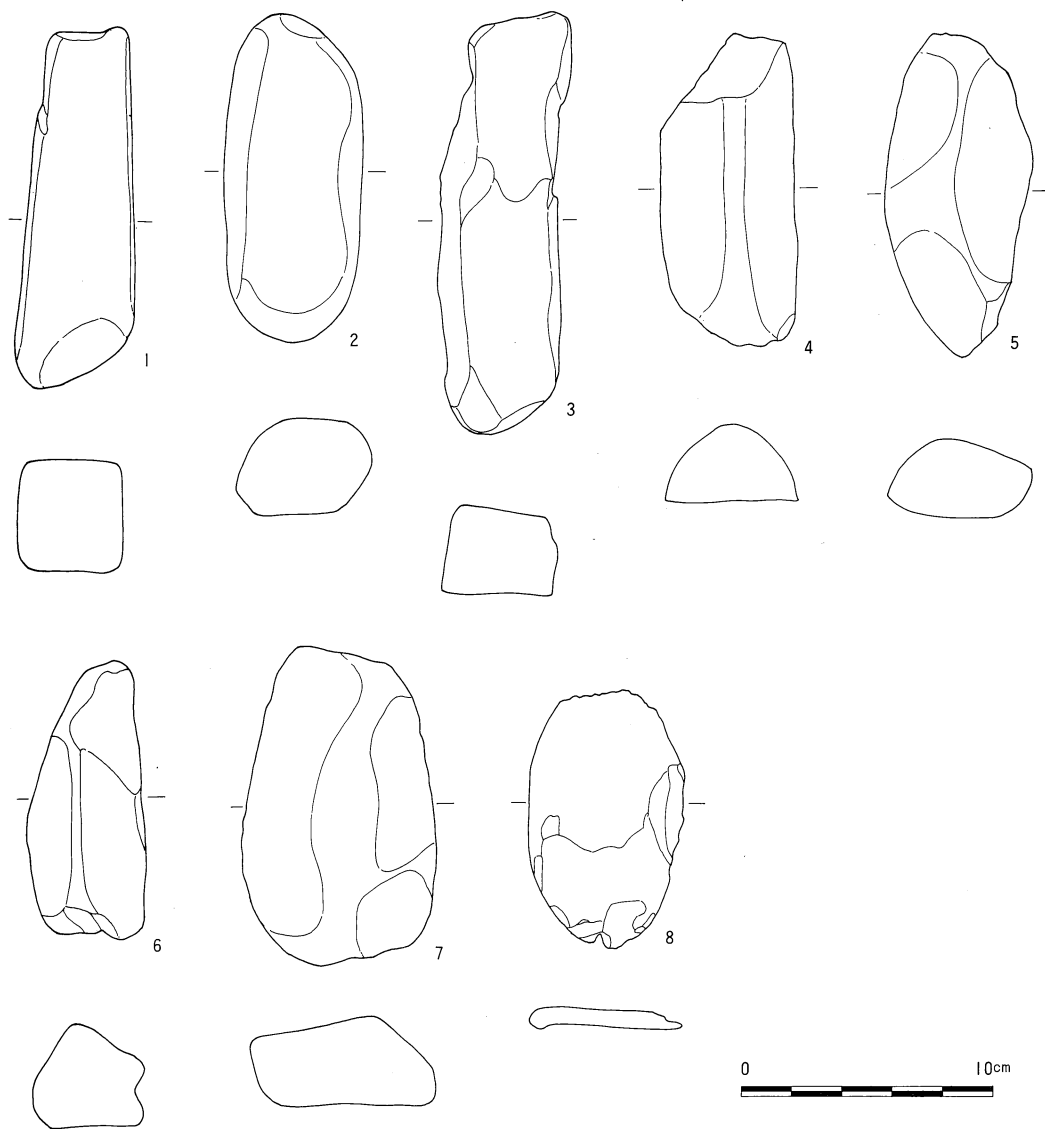
遺物 土器(第13図) 甕を中心に出土遺物が多い。他に内黒の坏片、須恵器甕片がある。8・9ともカマド周辺から出土している。甕形土器である。8は口径15.8cmで、最大径は胴中央部にある。器厚は1.2~0.7cmで、胎土は砂が目立っている。外面は縦方向に刷



- I 表土
- II 暗黒色土
- III 明褐色土
- IV 淡褐色土 (ローム粒少量混入)
- V 褐色土 (ローム粒, 黒色土混入) 一攪乱層
- VI 褐色土 (ローム粒混入) 一攪乱層
- VII ローム



第16図 I-102検出遺構 (上), K-102検出遺構 (下)



第17図 K-102検出遺構出土錘石

毛目調整し、内面は横方向に刷毛目調整している。口縁部は横撫でを行っている。茶褐色を呈し、焼成は良好である。9は、胴部破片で、器厚は0.9cm内外である。内外とも斜め方向にヘラ撫でが行われている。外面は暗黒褐色でススが付着し、内面は黄褐色を呈している。胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。

本遺構は古墳時代末期に比定されよう。

(篠宮 正)

石器 (第17図) 西壁ぎわの床面上に錘り石と思われる石が8個ほどまとまって出土した。1は14×4.5cmで、厚さ4.2cm、521gである。細粒砂岩製。2は13×5.5×3.7cmで、

425g。安山岩製。3は16.5×4.8×3.4cm, 508g, 安山岩製。4は12.5×5.5×3.0cm, 250g, 細粒砂岩製。5は12.6×5.8×3.2cm, 282g, 中粒砂岩製。6は10.9×4.5×3.9cm, 268g, 細粒砂岩製。7は12.5×7.5×3.9cm, 552g, 安山岩製。8は10.2×6.0×0.7cm, 79g, 頁岩製。最近こうした資料が増加し、民俗事例を採用して石器の用途も明確になりつつある。住居址から出土した本址の例も貴重な資料となろう。重量的にみると、500g前後の1, 2, 3, 7, と, 250g前後の4, 5, 6がみられる。錘具としての2種類の使い分けが推定される。

(小林康男)

(12) 遺構外出土遺物

1) 縄文時代

縄文早期の土器 (8図15~17)

1. 押型文 平出第一類に属するものである。G102グリッドから楕円押型文1片, 山形押型文1片と同じグリッドから押型文の小破片が1片計3片出土している。どれも細久保式タイプのものである。
2. 絡条体圧痕文 (17) 平出第2類に相当すると思われる早期末の土器である。H-101から出土し胎土に多くの繊維を含み, 厚手である。裏面は剥落しているのではっきりとしないが表面にはRの原体の絡条体圧痕文が施文されている。

縄文中期の土器 (8図18~33, 9図34~36)

1. I b 期 (18~31)

18~20はC-3グリッド, 21はD-2グリッド, 22はE-3グリッド, 23はG-102グリッド, 24・35はJ-102グリッド, 26~29はH-101グリッドから出土したものである。18・25は縄文を地文とし半截竹管状工具で平行沈線を施文している。19は口縁端部に棒状工具によるきざみをもち, 地文が縄文で棒状工具による沈線で施文している。21は円形円隆帯を貼付し, 口縁部及び隆帯上に縄文を施文している。22は半截竹管状工具による半隆起線文を施文している。23は半截竹管状工具により平行沈線を斜位, 縦位, 横位に施文している。24・26は縄文を地文とし, 棒状工具による刺突文, 沈線を施文している。25は縄文を地文とし, 沈線を施文している。29は縄文を地文とし半截竹管状工具によりU字形に平行沈線を施文している。30・31は網代痕をもつ底部でG-2グリッドから両者とも出土した。胎土などから本期のものと思われる。縄文を地文としているものは, 19・20・26・28がR L, 18・27・29がL R, 21がR L・L R両方を施文している。27・29は結節縄文を伴っている。

2. VIII 期 (32~36)

33・34はA-3グリッド、35はH-101グリッドから出土した。33・34・35は縄文を地文とし二本一単位の沈線の懸垂文を施文している。34は一部に磨消部を持つ。32は縄文を地文とし二本一単位の沈線の懸垂文と沈線の波状懸垂文を施文している。36は口縁部に近く横帯区画文の一部で隆帯で区画をなし、渦巻文を施文している。すべて加曾利E III式系である。地文の縄文は、33～36がRL、32がLRである。

縄文後期の土器（9 図37～41）

41は縄文を地文とし直線の沈線を施文し縄文の磨消部に列点文を施文している。40・41共に縄文地文で沈線を施文している。40は磨消縄文、41は充填縄文である。地文の縄文は39・41がRL、40がLRである。すべて堀ノ内式である。

縄文時代の土器については縄文時代の時期区分にしたがったが、中期については細分できる資料が本調査、3年度に渡った確認調査でそろいつつあるので井戸尻編年（藤森他・1964、武藤他・1978）にしたがい細分した。この細分は井戸尻編年をほとんど踏襲したものである。

I期 a——九兵衛尾根 I 式（54年度確認 F-22 検出住居址）

I期 b——九兵衛尾根 II 式（56年度確認 D-4 検出住居址、B-6 検出住居址、A-5 検出小竪穴）

II期 —— 貉沢式

III期 —— 新道式（ワ号住居址、へ号住居址）

IV期 a—— 藤内 I 式

IV期 b—— 藤内 II 式（レ号住居址、ホ号住居址）

V期 a—— 井戸尻 I 式（ヨ号住居址）

VI期 a—— 井戸尻 III 式（タ号住居址、ト号住居址）

VI期 b—— 曾利 I 式（ル号住居址、ハ号住居址、リ号住居址）

VII期 —— 曾利 II 式（ヲ号住居址、ロ号住居址、ニ号住居址）

VIII期 —— 曾利 III 式（イ号住居址）

住居址のない時期は遺構外からの破片をたよりとしたので遺構の存在は不明でありはっきりとしない。

井戸尻 III 式、曾利 I 式は主流をしめる唐草文土器（梨久保 B タイプの土器）が発生する時期が井戸尻 III 式後半と考えられる（宮坂他・1972）のでここでは VI 期として一括し a、b に細分した。この段階から曾利式タイプの土器とは様相を異にするいわゆる唐草文土器が発展してゆく（米田・1980）。

参考文献

- 藤森栄一編 1965 「井戸尻」
武藤雄六他 1978 「曾利」 富士見町教育委員会
宮坂光昭他 1972 「梨久保遺跡」 岡谷市教育委員会
米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」 甲斐考古17→1 (島田哲男)

2) 古墳～平安時代

H-5 グリッドから須恵器無蓋高坏破片が出土している(第13図7)。脚部のスカシは三方である。全体に厚みを感じる。坏部内面には緑色のガラス質の自然釉が厚くかかっている。灰褐色を呈し、少量砂を含み、焼成は良好である。6世紀に比定される。

(篠宮 正)

第IV章 遺跡の西限

今年度調査の目的であった遺跡の西限について、遺構の分布、遺物の出土状態によって考えてみたい。

まず遺物の出土状態からみてみよう(第1表)。A～F 1～6の南区ではグリッド毎の出土量には多寡が認められるが、各グリッドから遺物が出土している。その出土状態をより詳細に検討してみると、A・B・Cの各グリッドは概して出土量が多いのに対し、D・E・Fと北方に向うに従い出土量は漸減する。つまり、より南方面に向かって遺物が多くなることが指摘できよう。また、100点を越える出土を示すグリッド、C 1・3, B 6, E 1は遺構も検出されていることから、遺構が存在する地区には遺物が特に集中して出土することが知られる。

南区と浅谷をはさんで向いあう北区は、南区と比較して遺物は極端に僅少となる。特に、今回調査区域の最西端に設定されたI 3～7グリッドでは遺物は皆無であった。また、G～Kグリッドでは、G, Hグリッドに比較的多く、I～Kグリッドに向うに従い遺物は少なくなり、I・J・Kでは遺物の出土がみられないグリッドが大半を占めている。調査前の予想に反して、浅谷部分に遺物が多く、北に向かって傾斜地を上るに従い漸減していく。このような遺物の出土状況をみる限り、G～Kグリッドが設定された地域は集落の中心地帯には含まれず、その外縁部に属するものと考えられる。

では遺構の分布からみた西限はどうであろうか。今回の調査ではA～Fグリッドの南区で遺構が検出され、更に北区のI 102, K 102でも住居址が発見された。A～Fでは検出された遺構も多く、遺物の出土も遺構の分布によく一致していることから、南区ではもう少し比叡ノ山方向および西側に集落が伸びていた可能性が指摘できよう。しかし、北区においては遺構の検出が少なく、昭和26年の第4次調査時に南北に入れられたNトレンチでは最も北に発見された第33号住居址が浅谷低地に存在し、ここから北にかけて何ら遺構の発見がない。浅谷から北に向うと遺構が少なくなるという今回の調査と昭和26年の発掘とはよく照合した結果を示している。北区のG～K 1～103は平出遺跡の北西限を示し、I 3～7は集落外の地域であったといえる。

以上、遺構・遺物の状況からいえることは、南区では集落はまだ若干西に伸び、北区では北西限を示しているということである。南区・北区に介在する浅谷を中心に比叡ノ山際

にかけて集落が展開していたと推定される。

次に時期別の集落の西限を考えてみたい。まず縄文時代であるが、B 6, D 4 で住居址が、A 3, D 2 で小竪穴が発見され、北区では遺構は検出されていない。遺物の出土も南区に多く、北区では僅少であった。これらの検出遺構はその出土遺物から縄文時代中期前葉に属するものである。昭和20年代調査のA・P・Iトレンチ周辺の地域では中期中・後葉が主体をなしており、今回調査地区は時期的な様相を異にしているが、これよりも更に西方に伸びている可能性が認められる。またG102では早期押型文の土器片が出土している。以前の調査でも第33号住居址付近から押型文が出土したといわれ、平出遺跡ではこれ以外には押型文土器の出土がないので、この浅谷に集中出土する点は興味深い。

古墳時代～平安時代をみよう。南区A 3・5, C 1・3, E 1, 北区I102, K102と南区を中心として住居址が検出され、昭和26年調査のNトレンチでもかなり稠密に住居が存在することが確認されている。したがって、古墳～平安時代にかけてはK102検出住居を最北に、より南側・比叡ノ山に向かって集落が展開し、一部は更に西方にも伸びていたものと考えられる。

以上のように、各時代ごとに若干の相違は認められるが、G～K 1～103周辺を北西限とし、西限は今回調査地域よりやや西に伸びていたものと結論できる。 (小林康男)

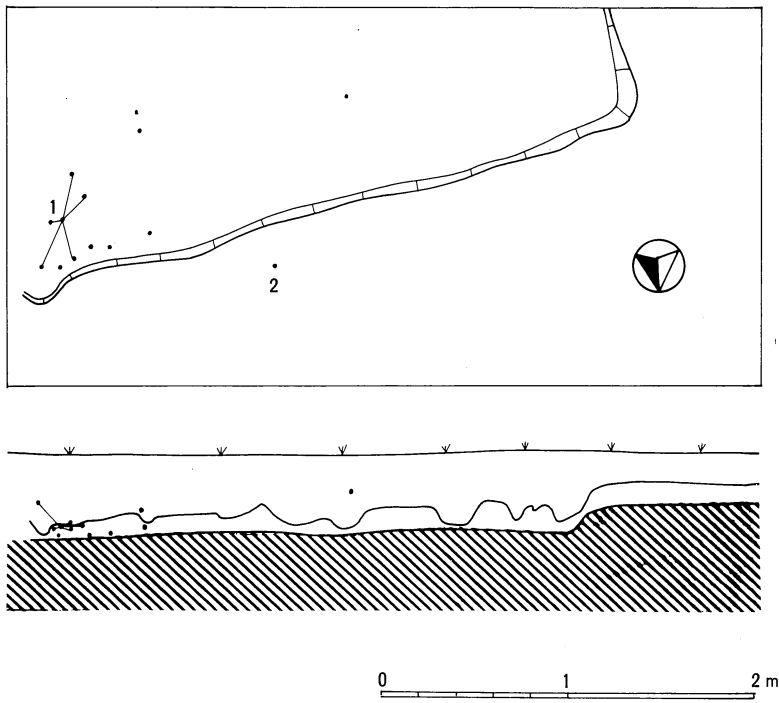
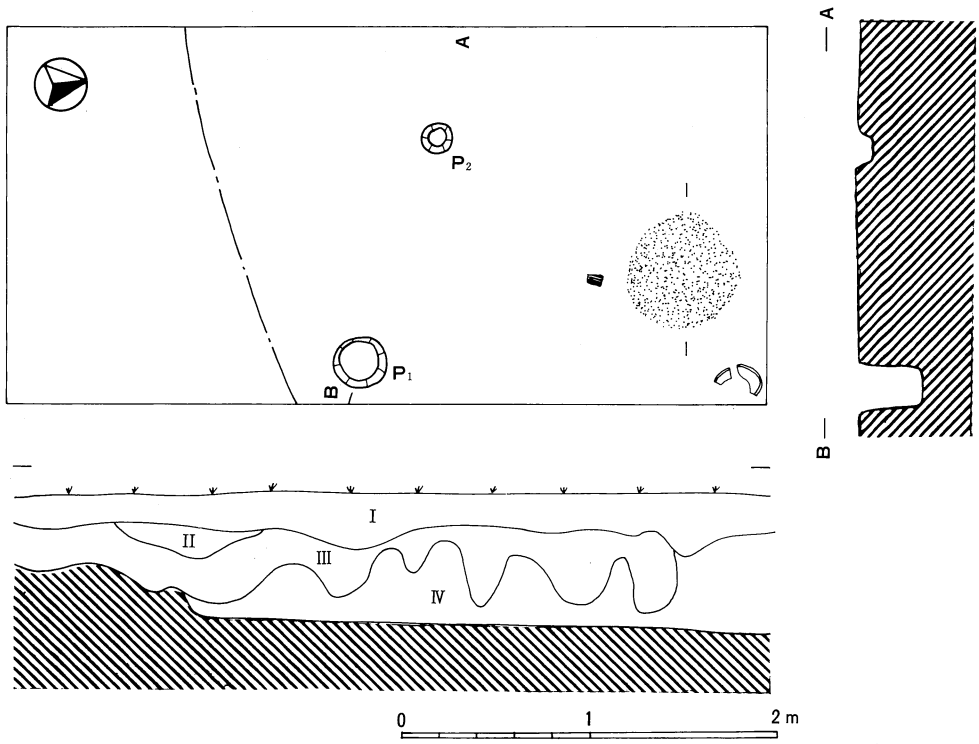
第V章 昭和54年・55年度調査の概要

第1節 昭和54年度調査

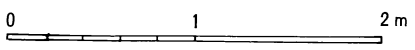
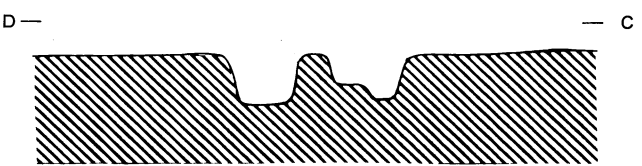
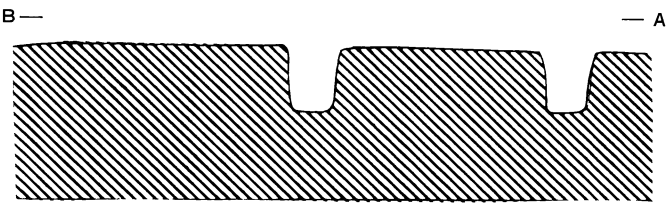
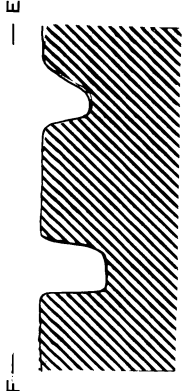
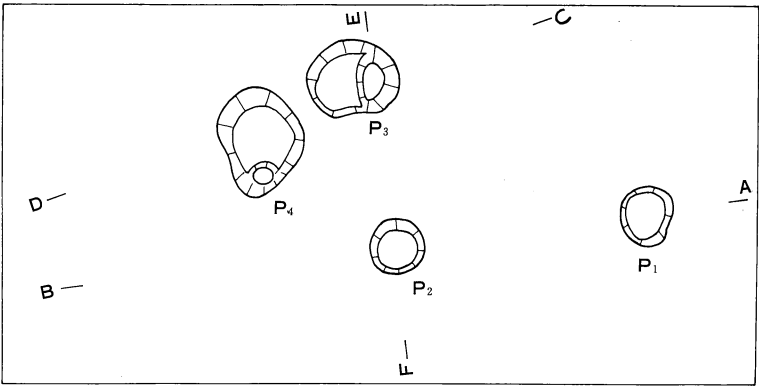
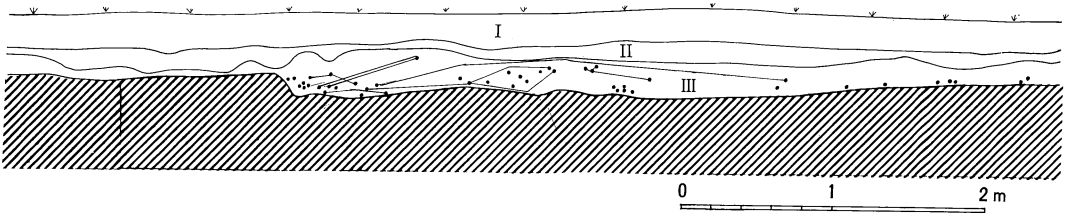
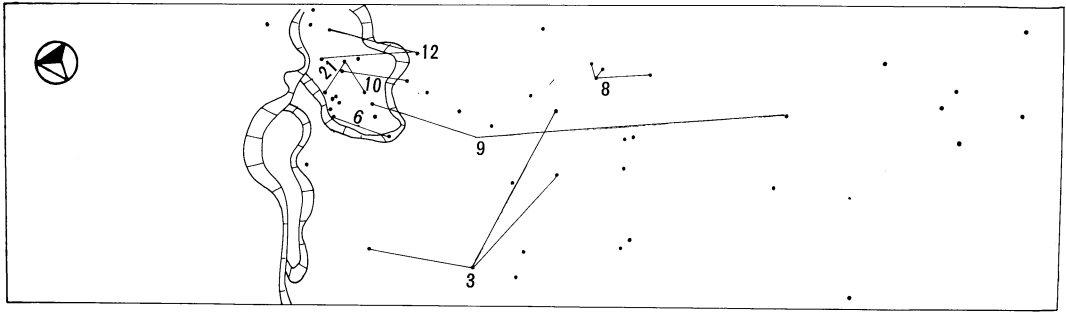
昭和54年度の調査は遺跡の東限を極めることを目的に、指定地内の東側を発掘した。発掘したのは、およそ東西180m、南北140mの範囲で、121グリッド、484m²にわたって実施した(第2図)。その結果、縄文時代中期九兵衛尾根式期に属する住居址1、古墳時代前半の住居址1、平安時代後半の住居址1および性格不明のピット群1が確認された。九兵衛尾根式期の住居址F-22(第18図)は、縄文時代の遺構としては、現在までに確認されたもののうち、最も北東端である。住居址の南側の部分を確認し、壁は把握できなかったが、良好な床面、炉と思われる焼土、柱穴が検出された。出土土器は少なく、石器も打製石斧1、凹石1である。古墳時代の住居址F-3(第18図)は、指定地の東端に位置する。確認されたのは住居址の北側隅の一部で、隅丸方形を呈する。柱穴、周溝等の施設は発見されていない。五領期に属し、平出第1様式と考えられる甕が出土し、北寄りの床面上から炭化材が検出されているが、その他遺物は少ない。平安時代の住居址G-12(第19図)は、今回の確認調査区域のほぼ中央部に位置する。北側の一部を確認し、北壁のみが検出された。一辺5m以上の規模をもつと推定される。堅緻で良好な床、焼土および数個の石を伴うカマドと周溝を検出したが、柱穴は確認されていない。遺物はカマドとその周辺を中心に、床面全域に見られ、床面直上のもが多い。それぞれ10個体程の土師器、灰釉陶器と、鉄製紡錘車1が出土している(第20図)。ピット群O-7(第19図)は南東隅に位置する。確認された4つのピットについては規則性は認められず、Tトレンチの柱穴址とは性格を異にするとと思われる。住居址の柱穴の可能性も否定できないが、その詳細な性格は不明である。なおP₂内から土師器坏が出土している。調査区域全体として、遺物の出土は、遺構に伴うものの他は非常に希薄であった。

以上のように、今回の調査地域は全体的に遺物の出土が非常に少なかったこと、遺構が集中する地域もなく、かなり間隔をもって散在していることなど、遺物および遺構の在り方を考えると、時代的な差異はあるが、ほぼ最東端地域に位置すると言えよう。

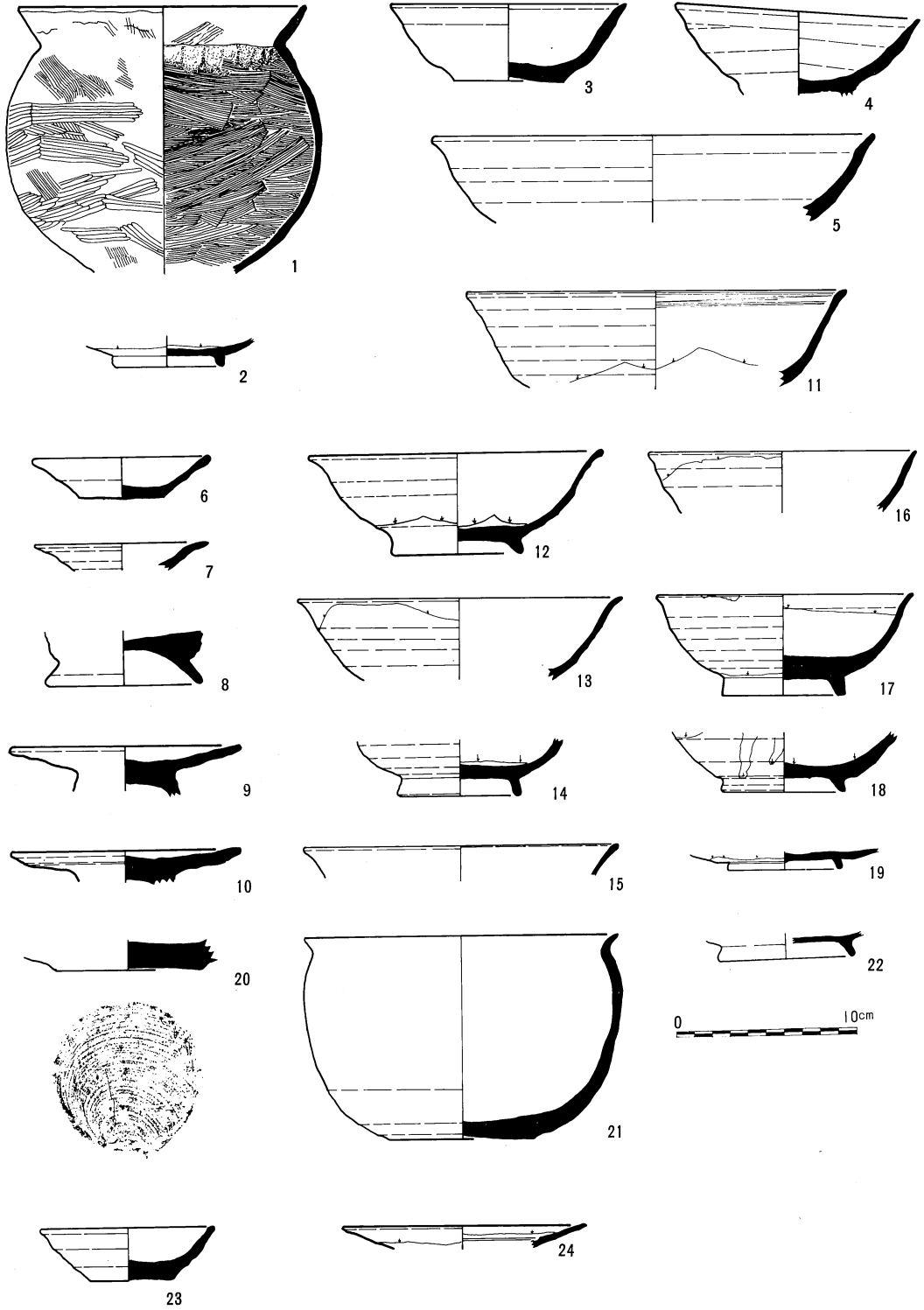
(込山秀一)



第18圖 F-22検出遺構（上），E-3検出遺構（下）



第19圖 G-12検出遺構 (上), O-7 検出遺構 (下)



第20图 E-3 (1·2), G-12 (3~22), O-7 (23·24)
出土土器

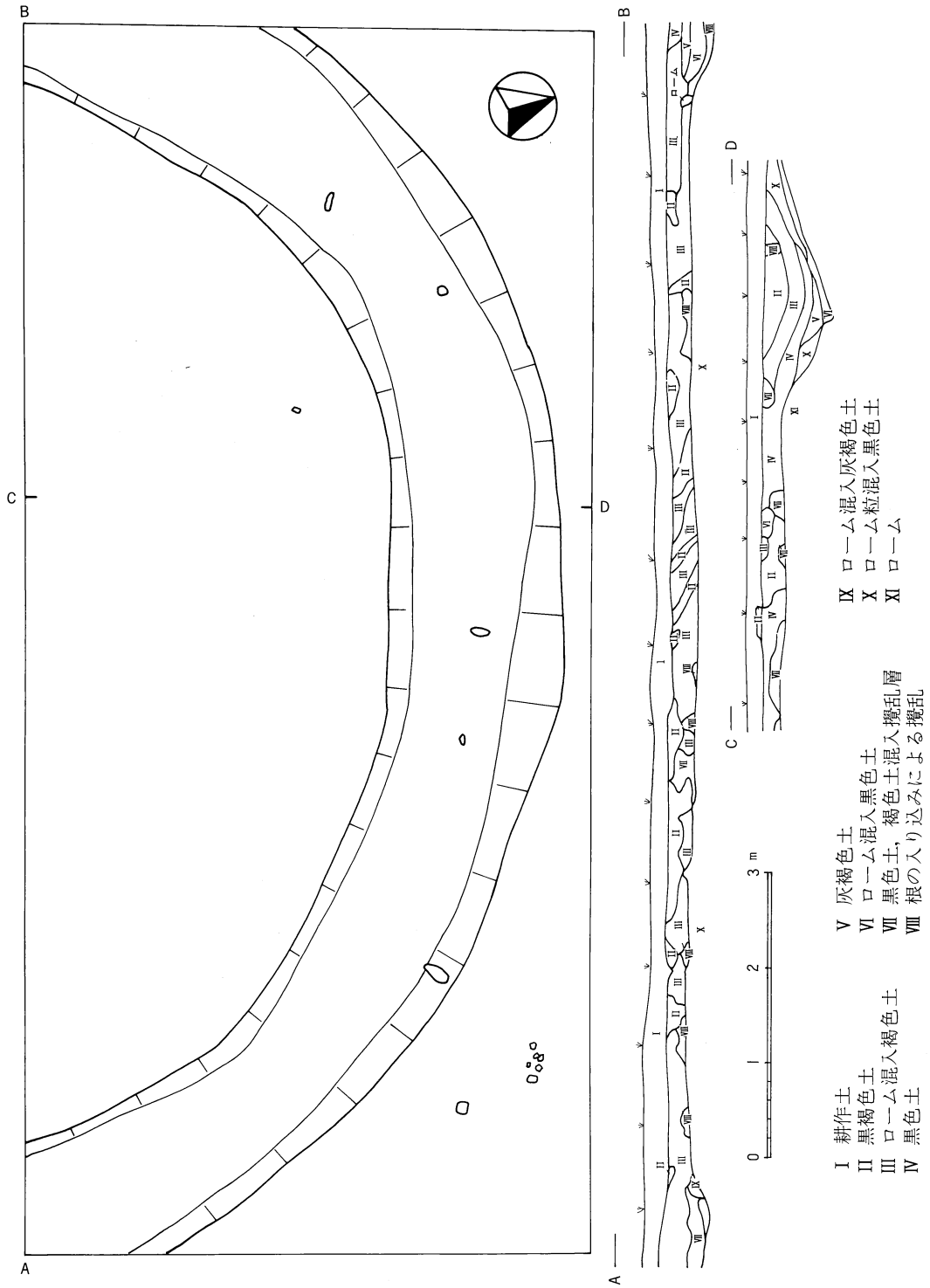
第2節 昭和55年度調査

昭和55年度は、遺跡の北限を極めることを目的に、史跡指定地内北辺地域の発掘調査を行った。調査地域は、東西350m、南北80mの範囲にわたって設定され、60グリッド、561m²を発掘調査した(第1図)。この発掘調査の結果、昭和20年代に発見された第11号住居址の東11m、第3号住居址北方26mの地域に円形を呈すると思われる溝状の遺構が検出された。確認された遺構は、この溝状遺構が唯一のもので、他の調査グリッドからは遺構は発見されなかった。

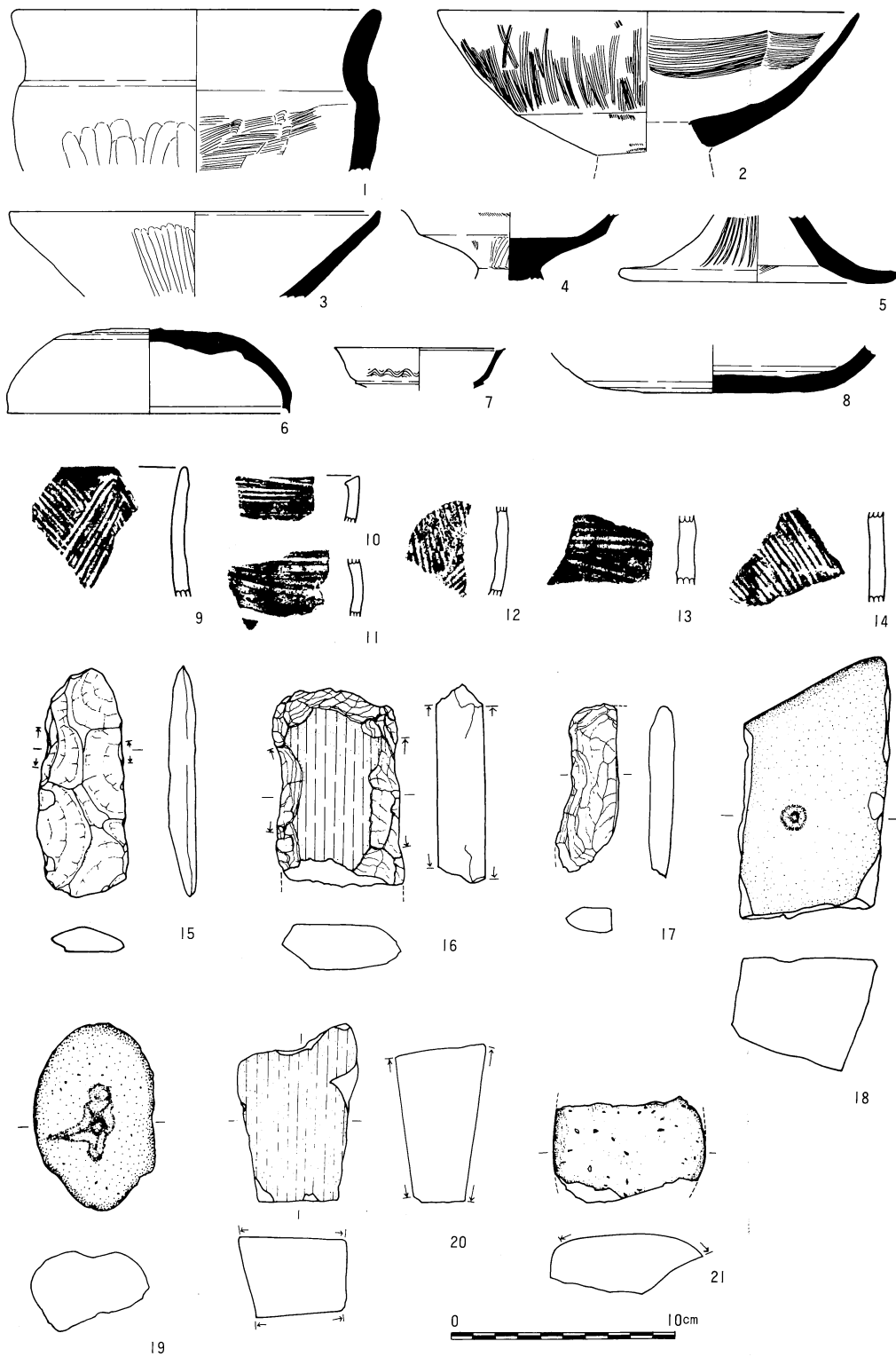
円形を呈する溝状遺構は、その $\frac{1}{2}$ ほどを露呈したにとどまったが、調査結果から溝外周の直径が15.5mを計る大きなものであることが推定された(第21図)。溝の幅員は1.9~1.5m、深さ34~18cmで、幅員は一定の幅を有するが、深さは一様ではなく起伏が目立つ。溝の内側は平滑である。この遺構からは土師器甕、高坏、須恵器坏蓋、糠、壺の破片が出土している(第22図)。この遺構は、出土した土器から5世紀後半から6世紀にかけてのものであると考えられる。

出土遺物は、この溝状遺構を中心とする前述の土師器、須恵器および縄文土器片39、弥生土器片8、打製石斧3、凹石2、磨石2のほかには、ある程度のまとまりをもって出土した地区はなく、各グリッドとも極めて貧弱な出土状態であった。わずかに縄文中期中葉・後期初頭に属する土器片、打製石斧3、磨製石斧1、凹石兼磨石1、凹石・磨石兼叩石1の石器類が出土したにすぎない。これら溝状遺構以外から発見された土器は2cm内外の小破片で、石器も断片的なものであった。

以上の遺構・遺物の在り方から、昭和55年度調査の目的であった遺跡の北限を考えると、縄文・弥生・古墳~平安と各時代ごとに若干の異なりは認められるが、およそ第3号住居址周辺をもって北限と限定できそうである。平出遺跡の中心は、この第3号住居址から南側、平出の泉にかけての地帯に展開していたと推定される。 (小林康男)



第21図 溝状遺構全体図 (1:70)



第22圖 溝狀遺構出土遺物

第VI章 遺跡の範囲

第1節 地形・地質からの検討

平出遺跡の立地条件を地形・地質の観点から分析し、特に今回の調査の目的であった遺跡の範囲について若干検討してみたい。

平出遺跡は、自然環境の項で述べたように厚い扇状地礫層をベースにしているが、隆起扇状地のため現在の田川や奈良井川の河床面より40mも高い位置にあり、地下水位が極めて低い。このような立地環境下にもかかわらず、古来よりこの平出の地に大集落が形成された背後には、平出の泉が唯一の飲用水源として、更には灌漑用水源として存在していた。

平出の泉は、この付近の基盤をなす古生層にレンズ状の産状を示す石灰岩の空洞に集まった伏流水が湧き出しているもので、恒常的に多量の湧水量をもち、しかもpH7.9という弱アルカリ性の水質のおかげで、この付近の酸性火山灰土壌(pH5.5)に対して灌漑効果が大きい。縄文期の飲用水源としては、単に地表浸透水の湧出と考えられている隣接の床尾の泉でも十分に供給可能のはずである。しかし土師期になり多量の灌漑用水が必要になると、それを充たすだけの十分な水資源が必要となる。平出の泉がこの条件を充たしていたことは、平出に古代集落が発達した最も大きな要素であろう。

それでは平出の泉の供給範囲を考えてみる。泉の北側からは渋川の小河川が流出しており、急斜面を流下して部落の中にはいると床尾の泉から続く浅谷地形によって回折され東流に変わる。水田適地は古来よりこの浅谷域にのみ限られており、周囲は相対的に高いため灌漑が難しく畑地利用に留まっている。従って集落は浅谷に沿って形成され発展したものと推測され、遺構は例外なくこの浅谷から北側100m前後の範囲内に分布している。

この浅谷は東方へいくに従って谷勾配が緩やかになり、東縁のTトレンチ付近（平出集荷場近く）では、ほとんど展開してしまう。現在はこの浅谷域に人家が集中し（旧上手村）、水田はここから東方へ広く展開しているが、当時は灌漑技術もほとんどなく恒常的に多量の水を必要とすることから、やはりこの浅谷域のみを水田用地に利用した可能性が強い。従ってこれに付随して設けられたと考えられる集落も、この付近を東限とみてよいのではないだろうか。

次に今回の発掘地点の付近、すなわち平出の泉から流水が浅谷に流れ込む地点より西側であるが、ここでも浅谷域が遺跡立地を規定している。浅谷が床尾の泉から比叡ノ山の北

側を迂回して延々と平出の部落まで続いていることが地形図で明瞭に示されていることから、ここを床尾の泉の湧水が流れたことはほぼ確実であろう。また層序からも腐植質の漆黒色土を産し、かなり湿潤な状態に置かれていたことは疑いない。しかし床尾の泉自体が元来、平出の泉と異なり地表浸透水の湧出であるから、湧水量は恒常的なものではない。浅谷域のI-102グリッドで検出された土師期の遺構からも判読されるように、時によっては単に湿地帯のような状態にあったと推測される。ロームはこの浅谷域では特にその上部が著しく剥脱されており流水浸食が伺えるが、その上に乗る縄文期あるいは土師期の土層がほとんどその層厚を減じていない傾向がみられ、当時の恒常流水の存在を否定している。この付近の浅谷域が、たとえ絶えず湿潤な状態に置かれていたとしても、それは縄文期の飲用水源には充分であるが、土師期の灌漑用水源には不充分であり、必然的に縄文期と土師期の遺跡立地が異なってくる。泉からの流水が浅谷までにたどる流路は現在、復元家屋へ通じる市道に沿っているが、もともとの流路は現在よりも大きく迂回しておりNトレンチのすぐ東側で浅谷に合流していたという話しである。水田適地はここから東側と考えられることから、土師期の遺跡の西限は今年度の発掘地点付近と考えて差支えないと思われる。また縄文期の西限については上記のような制約がないところから比叡ノ山の北側、浅谷域沿いにまだかなり西方へ続いている可能性が残っているとみられる。

以上のことから遺跡の東西の限界についてまとめてみると、土師期は浅谷の谷勾配が急角度で、しかもそこに平出の泉からの流水があった区域、すなわち西はNトレンチ付近から東はTトレンチ付近までが水田用地と考えられ、そこから数10mの距離内と結論づけることが可能であろう。また縄文期は立地条件のみからは推測し難いが、ただ西限については現在よりも西方へ延びる可能性があり、浅谷域に沿って床尾遺跡群との関連性も今後の課題として残るであろう。

(鳥羽嘉彦)

第2節 遺構・遺物からの検討

昭和54年度から3年間にわたった遺構確認調査の結果から、平出遺跡の範囲を考えてみたい。なお、遺跡の東・北限に関してより詳しくは各年次の調査報告書を、また西限については本報告書IV章を参照していただくことにし、ここでは大雑把に遺跡の範囲を概観してみたい。

遺跡の東限は、昭和54年度の調査によってほぼ確認することができた。昭和54年度調査地域は昭和26年の第4次調査で発掘が行われたS・T・Vトレンチの東側および北側の地区を中心として実施された。この調査地域では遺物の出土は極めて少く、しかも出土土器

は2cm内外の小片で、磨耗しているものが大半を占めている。遺構は3ヶ所で検出されたが、特定の地域に集中することもなく散在し、ある程度の集中性を示す地域はTトレンチまで南下しなければならない。こうした遺構・遺物の僅少性からVトレンチ48号住居址、G12検出住居址が東端を画し、遺跡はこれより長田および西方に向かって展開していたものと推定された。

遺跡の北限は、昭和55年度の調査によって確認することができた。昭和55年度調査では、第3号住居址(復元家屋)北方26mに溝状遺構が若干の遺物とともに検出された。これ以外には調査地区内からの遺構の検出はなく、遺物の出土も極めて少なかった。しかも表土層が北に向かうに従い厚みを減じ、これに従うように遺物も漸次減少する状況が看取された。現在検出された遺構中、溝状遺構が最も北に位置し、この溝状遺構の西方11mに第14号住居址がある。したがって、溝状遺構、第14号住居址周辺を最北限とし、これより南側、平出の泉方面にかけて集落が形成されていたものと考えられる。第3号住居址は北辺の中心的住居の1つであったが、かなり北に片寄った所に位置した住居址であったといえる。この他の昭和55年度の調査地では遺構・遺物が殆んで認められないことから、この地域までは集落は伸びていなかったものと思われ、集落北帯外縁部に属することが判明した。

西限は第IV章で述べたように、西から東に向かって伸びている浅谷周辺を北西限とし、これより比叡ノ山にかけての地域に展開していたと想定される。遺構・遺物の多くは浅谷南から発見され、北側からは僅少であったことから、北西限はNトレンチ第33号住居址、K102検出遺構を限界とし、これより北西に伸びる可能性は薄い。しかし、西方にはA5、B6で住居址が検出され、遺物も多いことから、まだ若干延長されそうである。

以上のように、断片的な確認調査の結果ではあるが、遺構の分布、遺物の出土状態から遺跡の範囲は次のように要約されよう。Vトレンチ第48号住居址、G12検出遺構を東限とし、これからまっすぐ西に向いSトレンチ第44号住居址、Iトレンチ第45号住居址、Uトレンチ第47号住居址を経て、第3号住居址、溝状遺構、第14号住居址を北限とし、更にE・Fトレンチの各遺構群を介して第33号住居址、K102検出住居址を北西限に、そして比叡ノ山北側へという境界がたどれそうである。このことは前節の地形・地質からの検討、特に平出の泉を中心とした飲用水、灌漑用水の在り方からの集落形成への影響、ならびに規制が遺構・遺物の分布ともかなりよく一致しており、この境界線が妥当性を有するものであることが知られる。

今回の遺構確認調査で明確になってきた境界は、集落の限界域であり、集落の中心地域は更に南側に寄った地域に展開していたことが判明した。遺跡外縁部の調査からは集落の

範囲はおよそ把握できたが、平出遺跡の本当の中心地区は明確にしたものとはいえない。今後、平出遺跡の保存、管理、活用を行っていくうえで、一日も早くこの中心地域の遺構確認調査が実施されることが望まれる。

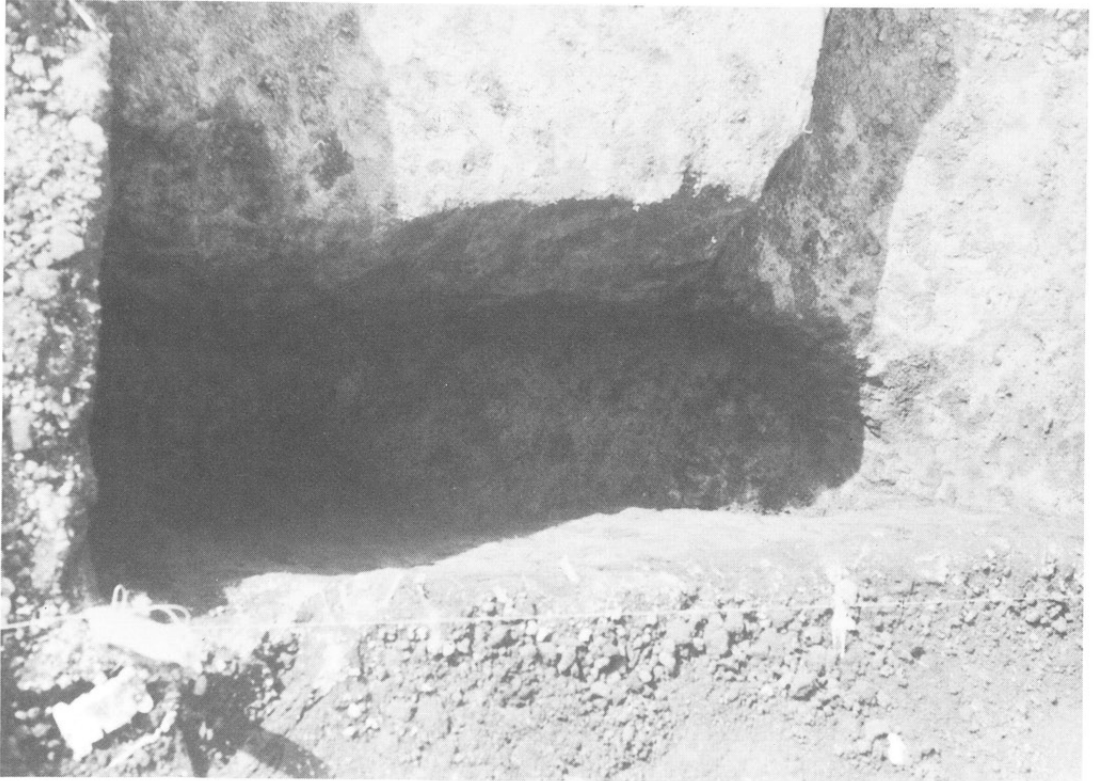
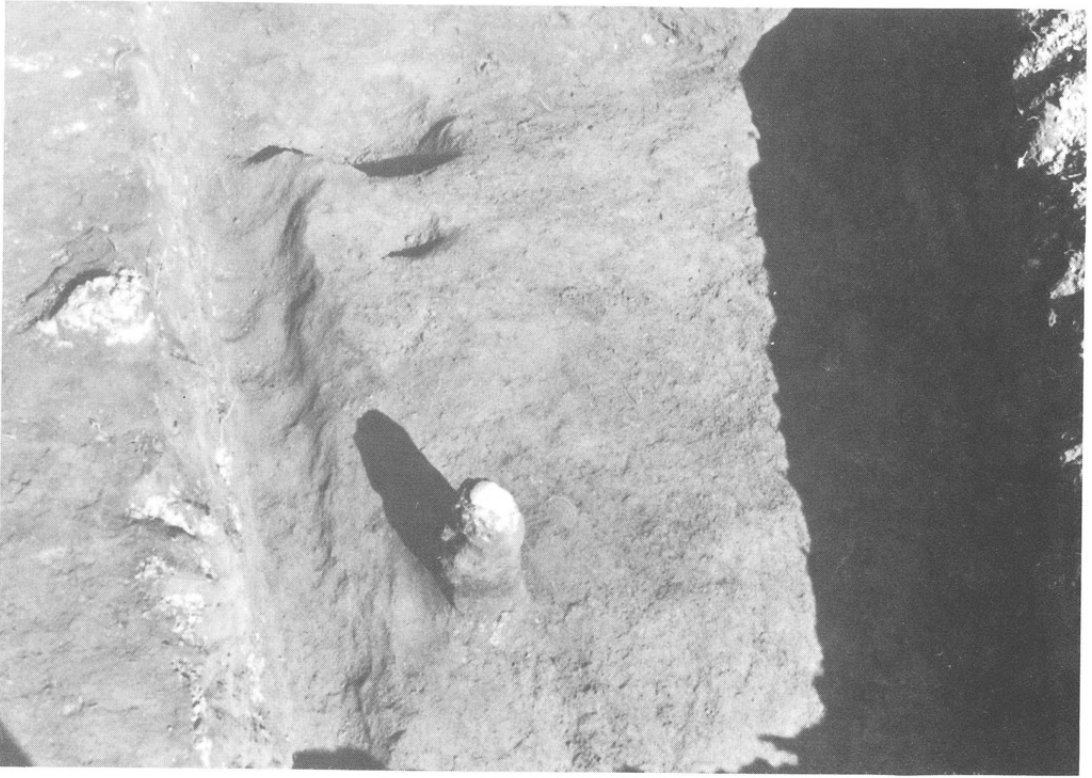
(小林康男)



図版第1. 上・全景 比叡の山から調査区を望む
下・調査北区



図版第2. 上・調査北区
下・調査南区



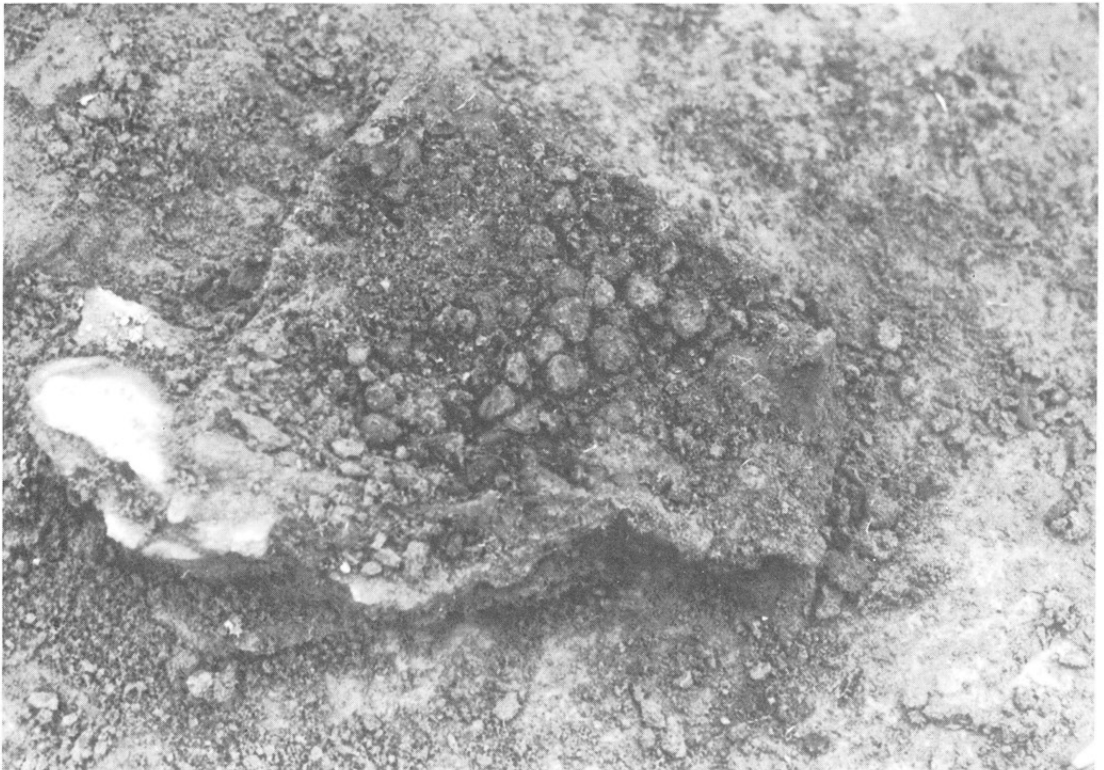
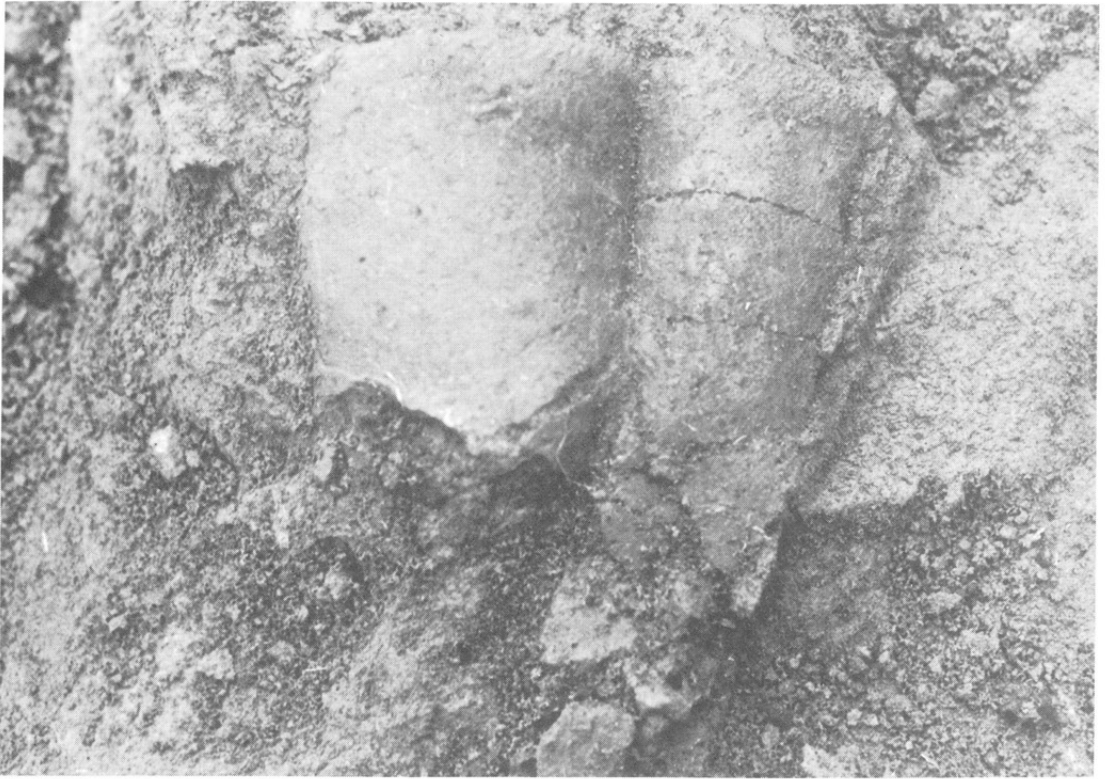
図版第3. 上・A-3グリット検出遺構
下・A-5グリット検出遺構



図版第4. 上・B-2グリット検出遺構
下・C-1グリット検出遺構出土鉄製紡錘車



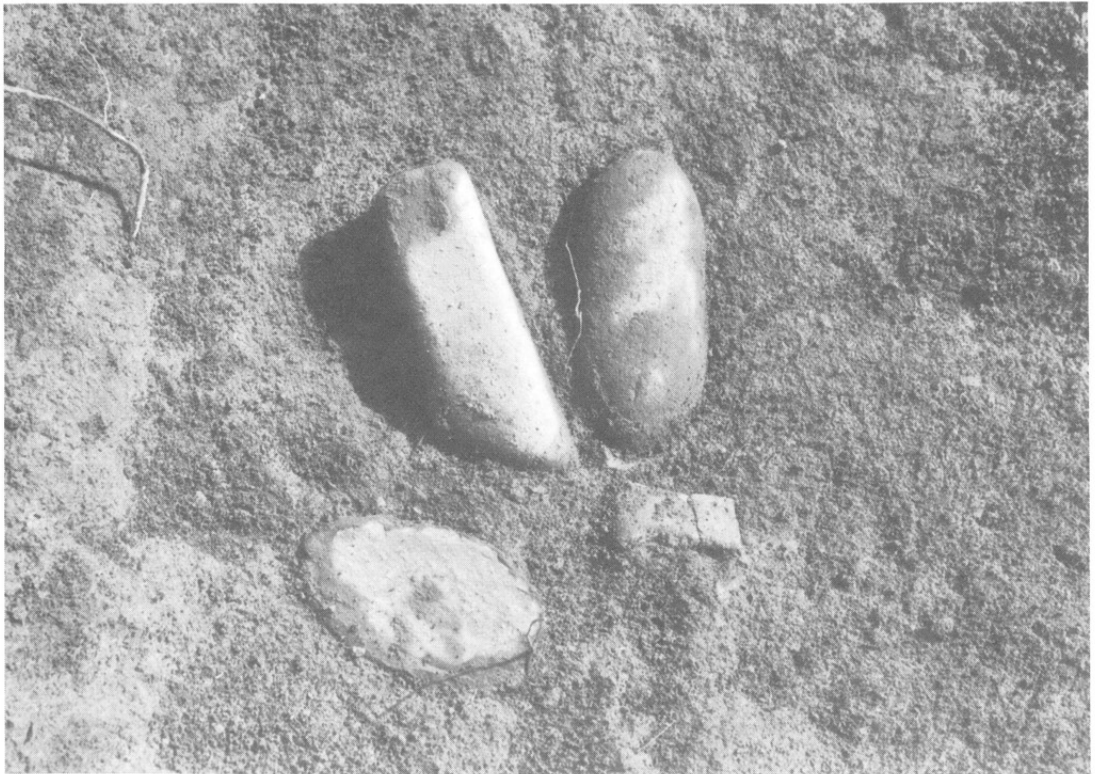
図版第5. 上・C-3グリット検出遺構
下・D-4グリット検出遺構・遺物出土状態



図版第6. 上・D-4 グリット検出遺構出土土器
下・同上内炭化栗



図版第7. 上・E-1グリッド検出遺構
下・I-102グリッド検出遺構



図版第8. 上・K-102グリット検出遺構
下・同上出土石製錘石

史跡 **平出遺跡**

遺構確認調査報告書

—昭和56年度—

(非売品)

昭和57年3月1日 印刷

昭和57年3月10日 発行

発行所 長野県塩尻市教育委員会

印刷所 (株) 高砂印刷所
